

---

# リディア王国物語 国土鳴動編

白石めぐみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リディア王国物語 国土鳴動編

### 【Nコード】

N9660C

### 【作者名】

白石めぐみ

### 【あらすじ】

ディナラーデ卿の内乱から3年の月日が過ぎ、ソルデイスは16歳の少年へと成長した。その彼の元へ現れた軍師・フレイル。彼が現れたことによりソルデイスを取り巻く環境が少しずつ替わり始める。

## プロローグ&人物紹介(前書き)

リディア王国物語の第三章部分です。先に王都脱出編 王国迷走編  
を読んでもらえると内容がわかりやすいと思います。

## プロローグ&人物紹介

リディア王家

王の記録より

それは、とても遠い約束、

そして履行されなかった誓いでもあった。

『彼』の破滅へと続く生を断ち切るための『剣』は、

『双剣』を待たずして、その命の終焉を迎えた。

これにより、『彼』は無限えいえんの生くるしみを余儀なくされ、

世界は滅亡への一步目を踏み出すこととなった

リディア醜聞記 より

アルガス王子夫妻の殺害

アルガス王子は妻であるアルムと息子ウィルフレッドをを彼女の弟であるストラッドの元へと出かせた。

アルムは不安を抱えつつ、身重のみで弟の下へと出かけた。

そして彼女は当初の予定通りに家に帰る。

しかしそこで見たのは冷たくなった夫を運び出す村人の姿だった。

死因は毒殺、目撃者の証言ではまだ年若い青年が彼の元を尋ね、そして逃げるように帰っていったということだった。

(中略)

彼女は自分の死期を察するとウィルフレッドを弟であるグランテイオの元へと送り出した。

しかし彼は父の時と同じ感覚を覚え、彼女にわからないように家の中に潜んだ。

普段どおりの母の下に訪れたのは父に似た顔立ちの青年だった。

彼は茶を準備している彼女の後ろに立つと無造作に腰の剣を抜き、彼女へとつきたてた。

アルムは解かっていたように黙ってその剣を受けた。

「やはり、あなた・・・でしたの」

事切れる彼女の口から零れた言葉に、刺した青年は冷たい目で彼女に答えた。

「あなたが、すべて悪いんですよ。兄上をあなたが誑かすから、私の苦悩は始まったんだ」

感情の一切こもらない言葉を吐き、彼は剣を抜くと何処か陶然としながらその場を去っていった。

- - - - -

## 人物紹介

### 《リディア王国》

ソルデイス・エンデドルグ・リグア・エリファイド 16歳

偽名：ソリユード・アドラム

大国リディアの王子。唯一、王位継承権を持つ。時見の能力を有する。

単身、ランクビットで潜伏生活を送っている。

クラウス・ガリユーゼ・ログア・エリファイド 19歳

偽名： 그레이・エイシエス

ソルデイスの兄。王位継承権を持たない。

ソルデイスを守るためにガイフィード大將軍の元にて兵隊長として働く。

シエリルファーナ・マジエスト・ログア・エリファイド 12歳

偽名：シエリル・エイシエス

ソルデイス達の妹。守られている立場から脱出するために剣の修行中。

神馬・ルシエラーラの騎乗者。

ウィルフレッド・ダイナラーデ・ログア・エリファイド 36歳  
バルガスの甥。諸事情により、15歳の時、王都へと引き取られる。

ソルデイスの誕生日の宴の最中に内乱を起こし、王位につく。

ルアンリル・フィーナ・エディン 19歳

精霊族を束ねる聖長。ソルデイスの養育係。クラウドの恋人。ウィルフレッドの従妹。

精霊族によくあるフィネガ（年齢により性別を得るという両性具有者）であり、未だ性別は未定。

現在、ガイフィードの元、聖司族の流れを汲むものを纏める役目をしている。

フレイル・ファード 23歳？

突如、ランクビットに現れた軍略に長けた青年。ソルデイスにいろいろ世話を焼く。

ウィンザ・バーキット 21歳

フレイルの相棒。時々分かれて旅をする。

キット、フィンディ 二人とも12歳

家族と逸れたところをフレイルとウィンザに拾われた少年・キットと少女・フィンディ。

どうやら姉弟だ双子ではないらしい。家族の姓やいろいろと不明。

スターリング・キャレット 16歳

精霊の森の近くの集落に住んでいた少年。

ソルデイス達とともにガイフィードの元に志願しにきた。現在、クラウスの下で副隊長をしている。

フランシエンド・ガイフィード 65歳

リディアの大將軍。現在リディア王国東北部、ロシキスとも近いブロージエカに駐留中である。

カジム・オージエニツク 45歳

リディアの南方將軍。現在リディア南東部、レナルドバードに近いベネシエンドに駐留している。

ソルデイスの直屬の上司。

レクター・ランズール 52歳

オージエニツクの副官。ソリユードを養子にしたいと思っている。

アルフレッド・アーシア・レネファランド・リグア・エリファイド  
31歳

光姫と呼ばれる運命を持つ姫。ウィルフレッドの妹。

王都脱出後は行方不明。

サイラス・ジエラルド・ログア・エリファイド 21歳

大国リディアの王子。王位継承権を持たない。ウィルフレッドと王妃の間の子供。

王都再脱出後はソルデイスの元に戻らず、一人でソルデイスのため活動している。

フェルスリユート・ガジエット 享年29歳

ロシキスの王子たちを逃亡させる命令をつけた人物。星替の名を持つ。

バルガスの第一王子でソルデイスの異母兄。ルミエールを庇って命を落とす。

バルガス・エルスフィールド・ログア・エリファイド 52歳  
ソルデイス達の父親。現在、時守の森に閉じ込められている。

ソフィア・レネ・エリファイド 40歳

リディア国王妃。バルガスの妻でソルデイス達の母親。レティア達の父の従妹に当たる。

現在ウィルフレッツの元にて軟禁中。

#### 《ロシキス竜王国》

ルミエール・フィネア・ローティア 16歳

偽名：エリアス・ライド

ロシキスの王女。ソルデイスが好き。現在記憶喪失中。

レティア・リストラル・リッカウル・ローティア 16歳

偽名：レイチエル・ベックモンド

ロシキスの王の義娘。ロシキス前王の娘。王位継承権を持つ。

国竜・ルシルヴィリアを操る竜騎士。ソルデイスの幼馴染で悪友。

ヘンリー・アルバルト・レイッド・ローティア 8歳

ロシキスの王子。ルミエールの弟。王位継承権を持つ。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

#### 専門用語

#### リディア王国

世界と同じ名を持つ国。和なる女神の補佐の血を受け継ぐ。

大地の恵みと神々の恩恵を受け、栄えている。

### ロシキス竜王国

リディアの隣国。農地の乏しい山地に位置している。  
その昔、リディアより竜騎士の一族が離反し、建国した。

### 光なす黄金・見透かす心

リディアの王位継承権の必須条件。  
光なす黄金リグア・ヴェールは髪の色。夜の闇の中でも煌めく髪を意味する。  
見透かす心エンテレパシスは、能力。読心力である。

### 竜緋石

ロシキスの王位継承の必須条件。  
特殊な血液で、力無き者や邪悪に染まりし者が触れると灼かれる。

### 星王

リディア王国の王の別称。

### 聖王

リディア国王の精神を支える者の別称。  
精霊族の名家・エディン家に生まれる事が多い。

### 聖長

精霊族の族長の別称。聖王以外から選ばれる。

### 光姫・森の精霊王

『真王』を選ぶとされる者。今は光姫アイシテアしか見つからない。

### 聖司族

魔法を使える理力を持つ一族。

精霊族・一角獣族・竜族などが上げられる。

### 理力魔法

己の中の理力を利用し発動する魔法。理力の量により強い魔法が使える。

### 精霊魔法

精霊と契約して使う魔法。理力は必要としないため聖司族でなくとも使える。

### 時守の民

時を見る過去見・予知見さきみと運命を見る星見ほしみ、世界を見る遠見とちみ・物見ものみなどから構成される異能一族。

ある事件をきっかけにリディア王家と袂を分けている。

### 星替ほしかえ

自分が触れた人間や物が辿る運命を変えることが出来る唯一の者。

### 時見ときみ

過去のすべてを見ることと、ある特定の未来を見て定めることが出来る唯一の者。

彼がみた未来はたとえ星替ほしかえや時変ときかえであっても替えることができない。

## プロローグ&人物紹介（後書き）

やっと始めることができました。リディア王国の第参部です。

ソルデイスは成長して16歳になっています。

王国迷走編での反省を踏まえつつ、今度こそソルデイスを主人公らしく書きたいです。

## 第一話：内乱の日々の中で

ウィルフレッドが内乱を勃発してから3年、リディア国内は数々の戦闘とそれなりの安定を保っていた。

当初、バルガスに替わる王として喜びで迎えられたダイナラーデ卿ウィルフレッドであったが、彼が王族と精霊族との間に生まれた『忌むべき運命の子』という事実と、何より、バルガスの時と然程替わらない国税の徴収に、次第に民人の心は離れつつあった。

しかし、更に酷かったバルガス王の時代に戻るのは如何な民衆といえども、望みはしない。

それゆえに、あの日、補佐人つきという条件はあるが、正しき『王位継承権』を得た王子が蜂起するのを国民は待ち望んだ。

だが、彼はすぐには兵を起さなかつた。それ以上に彼の王都脱出後の彼の足取りを知るものすら居ない状態だった。

民衆は、噂した。

彼は一人で王位に立てる時期を待っているのだ、と。

彼は臆病風に吹かれて兵を立てないのだ、と。

いや、彼は王都脱出後に死んでしまったのだ、と。

その、噂はどれも信憑性があつたが誰にも証明はできなかつた。

そして、物語は、動き出す。

ベネシエンド近郊の村・ランクビット

のどかな田園風景の中にあるその集落は、農村としてだけではなく温泉を有する保養地として有名である。

その地は南方將軍と呼ばれるオージェニック將軍の腹心・ランズー  
ル卿の有する軍により統治されていた。しかし隊長であるランズー

ルは殆どベネシエンドを離れないため、村の保安をするのは実質副隊長権限をもつ16歳の少年だった。

少年の名前はソリユート・アドラム。黒い髪に水色の瞳を持つ美しい少年だ。彼の本名はソルデイス・エンデドルグ　　周りには勿論、オージエニツク達にも知られていないが、正式な王位継承権を持つ王子だ。そしてダイナラーデ卿の軍が血眼になって探している人物でもあった。

兄弟たちと別れてブロージエカからベネシエンドへと南下した彼はオージエニツク卿の庇護の元、制しいにランズール卿の指揮下に入り、その権能でと知性を持って着実に副隊長となるまで地位を高めていた。

当初、あまりに若すぎる副隊長就任に村の人間や既存の兵隊は彼の出世を訝しんでいたが、日が経つにつれ、普段は読書をして存在いか不在いなか判別わかなくせに問題が発生すると鮮やかな手腕で解決していく彼を認めるようになっていた。

それに普段あまり偉ぶらない態度は部下たちにも好印象をもたれている。

ソルデイスはいつもどおりにお気に入りの木陰で読書に勤しんでいた。上げるべき書類は午前中に上げてある。補佐に入ってくれている自分より年長の人間は彼のこの時間を大切にしてくれてよほどの事が無い限りは少年の穏やかな時間は保たれるはずだった。

「なあなあ、聞いた？ソリユード」  
話し掛けてきたのは隊の中でもソルデイスと同じ年齢の少年グループの一人だった。

彼らは副隊長という彼の立場に臆することも諂こうこともなく、いつも気さくに話し掛けてくる。今日も何か面白い話題を仕入れたみたいで、早速、自分の所に話に来たらしい。

ソルデイスは読みかけの本から顔をあげると声をかけてきた少年に

感情の乏しい顔を向けた。

「なにを？」

首を傾げる仕草は16歳より少し幼く見える。余程、小さいときの栄養状態が悪かったのか、彼は同年代の少年たちに比べて少し身体が小さかった。

そんな彼の仕草に彼らはソルデイスを囲んで座ると、最初に声をかけてきた少年が話を続けた。

「ベネフの村の攻略の話さ」

「ああ」

それは郡内にて今、一番、話されている内容だった。

正確にはベネフ周辺の村を攻略しようとしている敵に対して、神業みたいな戦法で勝ち方を教えていく軍師の話だ。

昨日、ベネシエンドのオージエニック將軍から回ってきた報告書に彼のことが記載されていた。

名前も年齢も不詳、茶色い髪を持ちその容姿から20代後半だろうと推測されている。

第一話・内乱の日々の中で（後書き）

ソルデイスやけにのんびりしています。

この章から彼の一人称が『僕』 『俺』へと変更です。

その方が普通の少年っぽくていいかな？と思ったからです。

最初暫くはきちんとソルデイス中心に話がすすみます。

## 第二話：初恋の思い出

彼が一番最初にベネフ村に現れたとき、村はダイナラーデ卿の配下の軍の侵攻という名の略奪を受けて陥落の寸前だった。

要塞を有する村ではない。いつ、落ちたところでおかしくなかった。だがその青年はふらりと村に現れると戦いに慣れない村人に奇策ともいえる作戦を与え、見事にダイナラーデ卿の軍を退け、その軍団のトップを捕獲することに成功した。

他にも越境をしてきたレナルドバードの兵隊崩れ達の攻撃を受けていたピュリットの街や、度重なる野盗の略奪を受けていたエッツジエイドの街など、攻撃してきたものを追いつただけではなくその首領を捕まえ、その後の防衛策を築いていく彼はすでに南方（ミナ）では有名になっていた。

報告書でも、彼の手腕は称えられ、もしこの村に来ることがあれば軍に入るように説得して欲しい旨がかかれていた。

「天才的、軍師、ねえ」

どういう人物なのか、会ってみたい。彼がしく布陣はどことなく異母兄の教えてくれた作戦に似ていたから。

「まあ、俺たちにはアドラム副隊長がいるから必要ないけど」

人懐っこい笑みを浮かべる少年が、そう言うと彼らは「確かにそうだ」と笑う。

「誉めても、何もでないぞ」

ソルデイスは本を読むのを完全に諦めて、小さな冊子を地面に置いた。

「何もでなくていいです。女の子、紹介してくれたら」

「それが、お前の恋愛話とかきかせてくれたら」

「そっぴや副隊長からそっぴや話ききませんよねえ」

「っていうか、ちゃんと初恋してるか？」

次々に好き勝手に宣う彼らにソルデイスは文句を言おうとした。

「俺にだって、初恋ぐらい・・・」

そこでソルデイスの言葉が止まった。

初恋　　、そんなモノしたことあったらどうか。

ふと、思い出したのは幼馴染みの義姉である少女だった。王都陥落の日、中庭の茂みの中で自分の腕の中で震えていた少女。怖かっただろうに気丈に振舞い、『大丈夫だから』という自分の声ソルデイスにこくりと頷いていた。

今思えば、初対面に近い相手を純粹に守ろうと思ったのはあれが初めてだった気がする。

「おい、どうした？黙りこくって」

言葉を切ったまま考え込んでしまったソルデイスに回りの人間が不思議そうな視線でこちらを見ている。

「いや、たぶん、あれが初恋だったのかもというのを思い出して  
て」

「お、むつつりすけかあ？」

少年の一人がにやりと笑うとみんなが一斉にソルデイスに詰め寄る。今まで村中の女の子にもてまくっているくせに、誰一人として真つ当に相手にしないソルデイスの情報を得るようと、彼らは自分の女友達からせつかかれていたのだ。

「どういう子？」

「友人の義姉あねだよ。美人系統の顔立ちだけど仕草は可愛かったと思う友人も美人系では有るが壊滅的に女らしさが無い性格をしていた。しかし彼女はそんな義妹とは正反対で少しだけ触れたその精神も、立ち居振舞いもすべて可愛かった。

「なんだよ、あやふやだな」

「一緒にいたのはたった二日だけなんだ。その後、行方知れずだから」

いや居場所は知っている。だがそこに入っていく事が自分には出来ないだけだ。

しかし、彼のその一言で回りは適当な誤解をしてくれたのか、「まあ、落ち込むな」とかいろいろと慰めの言葉を掛けてくれる。ソルデイスはそんな彼らの誤解を解こうとはせずに小さく嘆息してみせた。

「それで、俺の情報でどこの女の子を落とすつもりだ？」

お前たちの考えなどお見通しだとばかりに言う彼に今度は回りの少年たちが言葉を詰まらせた。

「まったく、そんなことだと思っただよ・・・そんなことで」

ソルデイスはそこで言葉を切ると急に本を持って立ち上がった。無言で耳を澄ませどこか遠くを見つめる瞳で辺りを窺う。

「馬の蹄・・・馬車隊もついている。本格的な攻めだ」

彼らには聞こえない音を聞き、感じない風景を見る彼の言葉に全員が緊張感を漲らせる。

その言葉を裏付けるようにソルデイスの補佐をしている青年の部下が彼の元へと全速力で走ってきた。

「副隊長！敵襲です!!!」

叫び声に近い報告に彼は目の前の少年たちに指示を出す。

「わかった、グレッグ、ザック、馬庭に言っつて馬の準備を。ビクターとプライムは村長の家に言っつて村人への対応の準備を。後は俺についてきて、マキシムの報告を元に作戦会議をする」

「了解x7」

年若いとはいえ、経験を十分に踏んでいる彼らはすぐに礼をするとそれぞれの持ち場へと走っつていった。

## 第二話：初恋の思い出（後書き）

いきなり初恋話です。

ソルデイスの初恋の相手はルミエールのようです。

話を聴いている少年たちはまさか『友人』までも美少女だとは思っていません。

話としては少しだけ風雲急を告げてきました。

### 第三話：作戦会議

ソルデイスが駐屯場としている家屋に戻ると補佐役のマキシムが机の上に地図を広げて何やら書き込んでいる最中だった。

彼はその手元にざっと目を通すと、眉を顰めた。

「デйнаラーデ卿の軍がここまで出張ってくるのは珍しいな」

王都から中々動く気配のない彼の軍がベネシエンド以南のこの村に兵を派遣してくるのは珍しい。

「トラント卿の部隊ですよ。あの人は所領がここに近いですし、前から鉾山も有するこの地域を欲しいと狙ってましたから」

マキシムの説明に合点がいったソルデイスは過去に王都で見た彼の人となりを思い出す。そういえば陥落の際、彼らの部隊は略奪・陵辱・殺戮にデйнаラーデ卿に窘められていた。

あの混乱の中で見せた彼の本性を鑑みれば、目の前にある鉾山に自分の軍を差し向けるのは当然だろう。それに今、ランクビットを守っているのは勇猛果敢で知られるランズール卿ではなく、16歳と年若い少年なのだから攻略も簡単だと思っっているだろう。

それなのに彼はトラの威を借るキツネのように『デйнаラーデ卿の軍』として進軍してきている。きつと勝てば鉾山を自分のものとし、負けても自分の軍の不名誉にならないようにという浅はかな知恵だと思われる。

「見張りからの情報では軍は街道をひたすらこちらに向かっているそうです。その数、2000」

マキシムの指差す先を見ながら、ソルデイスは頭の中で戦闘の形を描いていく。

「しかしこちらの山道にも見かけぬ男たちの軍団が歩く姿が目撃されてます、こちらは凡そ500ぐらいかと思われます」

それは山越えのルートで騎馬では無理だがそこその山馴れした男ならば容易く越えられる道だった。

「先に山越組が奇襲か、それとも街道組みとやっている最中に背後に回り村へと入るか」

駐屯する兵隊は限られている。伝令に出す分を考え、二つに分けるのは難しい。

更に村の傍で戦闘が始まれば収穫前の農作物にも影響があるし、村全体もただではすまない可能性も出てくる。

「ベネシエンドへの伝令はクローリーとウエネットを。出立の準備は」

「出来ております」

大方の予測をつけていたマキシムは傍に控えていた伝令役の青年へと視線をやる。彼らは弁えたように頭を下げると、一刻を無駄にする事無くその場を後にした。

「どこかに陣営を構える気配はあるか？」

「今のところは・・・」

「そうだろうな。もし構えるとしたらここぐらいか」

ソルデイスが示したのは村から近い平坦な平原だった。騎馬で街道を走ってきているならそこは最終的に陣を組むのに適したところだった。

ソルデイスは水色の瞳で地図を睨むととんとんと、と三つの場所を示した。

「見張りはまだ外に居るだろ？今の場所に伏兵がないか見てくれ」

マキシムは地図上で示された場所を見て、はっとした。確かにそこは目立たないものの奇襲を掛ける兵を潜ませるには適した場所だった。

「トランド卿っていうのが俺の知っている人ならば、連れてくるのは野盗上がりの傭兵が多いはずだ。適当な大義名分を持っているけど、したいのは略奪だ」

鉾山を押さえてディナラーデ卿に渡す前に彼らは村の人間から悉く略奪し、力での支配を確立するだろう。そのような事態は避けねばならない。

「前に旅芸人一座と一緒に旅していた時に野盗の攻撃の仕方を用いた棒の人に聞いた。彼らが狙いを定めるとしたら、軍と軍がぶつかる少し後方、この辺りに横殴りで攻撃を仕掛け、更に分裂して村を襲うはずだ」

村を押さえられたら、こちらの負けだ。

彼らは村人の命を盾にして更に手を拱く兵を滅してゆくだろう。

「兵は3つに分ける。一つは主力として村の前面に陣をつくる。もう一つは村の中に潜み、市街戦になった際に伏兵として動いてもらう。最後の一つはこの道をとおり、この500の軍勢に対して奇襲を掛ける」

ソルデイスが示したのは500の軍勢が進んでいるという道よりも更に厳しい山道だった。確かにこんな道を進軍してくるとは思わないだろう。

「それじゃ、もう一つの伏兵にまづくない？」

不意に響いた声に全員の目がそちらに向いた。

### 第三話：作戦会議（後書き）

謎の男、登場。

登場人物が余りにも増えすぎて名前のストックが怪しくなっています。

もともと外国人の名前ってあまり持ち合わせが無いので、主要人物以外は四苦八苦しながら搾り出しています。

話的に、展開しているのかしてないのか微妙な話です。

次回でもう少し話を動かしたいです。

大失態です。3話めにして人の名前の間違いに気付きました。

オージエニツク卿の副官はフライアンテ卿ではなくランズール卿でした。

フライアンテ卿はランズール卿の甥です。

## 第四話：現れた軍師

見ると戸口の所に見知らぬ男が立っていた。

年のころは20代後半ぐらい、まだ30歳は越えていないだろう。

明るい緑色の瞳は若葉から零れる光のように輝いていた。顔立ちは悪くないが、何処となく飄々とした態度が彼から二枚目の雰囲気を取り去っていた。

ソルデイスを除く全員が突如の乱入者に剣の柄に手をかける。

「伏兵？」

ソルデイスは回りの緊張を他所に、乱入者である彼に静かに問い掛けた。

「おや、信じてくれるの？」

周りの人間の反応の方が当然だと思っているのか、男は逆にソルデイスの態度に目を見開いた。

「それでも、勘はいいんだ。それに丸腰の人間相手に刀を向ける趣味は無いから」

どこか小馬鹿にするような言葉にも挑発されることはなく、ソルデイスは先程彼が指し示した場所に伏兵がいる場合のシュミレーションを開始していた。

周りの兵はソルデイスの言葉どおり、彼が丸腰なのを見て取るととりあえず柄から手を離れた。

「やけに向こうがこちらの地形に詳しすぎるな」

一人、地図と向かい合っていたソルデイスは小さく呟いた。手元にある情報と男から齎された情報を鑑みて、敵にはこの近辺の地形に精通している者がいるようだ。

ランクビット村は開けた農村であるが、山々に囲まれており、たどり着くには街道を通るのが主流となっている。確かに伏兵が隠れているところに通じる道や、第二隊が向かってくる山道もあるにはあるのだが、地元の間人しか知らないはずだ。

もちろん、地の利に長けた人物が向こう側の陣営に手を貸さないとはい切れない。

だが、この村の殆どの人間が何かしらオージエニック卿に恩が有り、少々の金貨で裏切るとは思えなかった。

「そつえば、近くの街道沿いで面白い話を聞いたけど」

声を発したのは先程入ってきた男だった。ソルデイスは彼に視線を向けると先を促す。

「トラント卿とフライアンテ卿が内通してるって」

その言葉にその場に居る全員の顔が引き締まった。

余り考えたくないことだが、在り得ないことではない。

『ソリユード・アドラム』が入隊したと同時にランズール卿は甥であるフライアンテ卿を遠ざけるようになった。もともとランズールはフライアンテの行状をあまりよく思っていなかった。そのため、なかなか彼を自分の後継者として指名しなかったのだが、まだ13歳の少年だったソルデイスを襲った事件によりそれは明確に後継者候補からの排除に繋がった。

そのうえ、ランズールは『ソリユード・アドラム』の人柄を気に入ってしまった、彼を養子にして自らの跡を継がせたいと考えている。

「……あの方のやりそうなことですね」

長くランズールの傍にいたマキシムはフライアンテの人柄を思い出し、溜息混じりにその言葉を吐き出した。傍で聞いていたソルデイスは苦笑交じりにその言葉に頷く。

「かといって糾弾できるほどの証拠もない。こちらが訴えたら、逆に『不名誉な噂を流された』と騒ぎ出すだろうね」

その場にいた騎士たちは年若い副隊長の意見に同意した。

以前、フライアンテはソルデイスがダイナラーデ卿に通じていると自ら噂を流し、それを意気揚揚とランズールに報告したことがあった。

その時、彼はランズールのみでなく南方將軍であるオージエニックにも叱責を受けた。

今、証拠の無い状態でソルディス達がそれを上に報告したら、彼はその時の仕返しとばかりに反撃をしてくるだろう。もちろん、それを見込んで自分の不名誉な噂を流している節も感じられる。

少し考えるようにその場が静まり返る。しかしすぐさまそれを破るように騒々しい足音が廊下から響き渡った。

「副隊長！ やっぱり伏兵ありです！！」

それは斥候に出ていたビージェットだった。彼はすぐさまソルディスの前に置いてある地図に飛びつくともソルディスが示した3ヶ所と男が示した1ヶ所、計4ヶ所に印を打った。

#### 第四話：現れた軍師（後書き）

軍師、登場です。

と、いつでも作戦はソルディスの指揮どおりですので、軍師として働いていませんが。

そういえば、男の名前、まだ出てきてません。

次にはちゃんと出さないといつまでも『男』表記のままになってしまいそうです。

## 第五話：軍師の名前

ソルデイスはビージエットの書き込みを確認すると隣で控えるマキシムを見上げた。

「先程、言った案に凡その変更はなしで、村に残す伏兵の部隊は身を隠しながら、ここの伏兵が動く瞬間に襲い掛かるように配置変更を」

地図の上を指差しながら指示を出していく年若い副隊長の指示をその場に居るすべての人間が真面目に聞く。

男はその様子に少し感嘆しながら彼の手腕を確認した。

（殆ど、俺の考えてる案と一緒だな………信頼がある分、みんなの理解が早い）

この村に来る前に仕入れた情報どおり、ここには優秀な指揮者とその部下が揃っている。

（それに……）

彼は地図に向かいながら何度も作戦をシミュレートしているソルデイスを見た。

……そう、やはり間違いなく、彼は『ソルデイス・エンデドルグ』だ。

当初、大將軍のところを身を寄せていると思われた彼だったが、どこをどうやったのか、こんな辺境で身を隠している。

（あの王城で見せていた表情とは違ってはいるけど、間違いはない）

『ロシキスの薔薇』とまで称えられたソフィア王妃ゆずりの整った顔は、青年期に向かうにあたり精悍さを増しているが、その優しい水色の瞳はやはり彼が『彼』であることを明確に示している。

もともと自分の優秀さを国王に見せないよう気をつけていたほどに頭のいい彼が、優秀な指揮官になるのは当たり前のことなのだろう。

止め処も無い考えをめぐらせながら一つと会議を見守っていた男

は、不意に顔を上げたソルデイスと視線をかち合わせた。

「こんな感じの作戦でよかったかな？噂の『軍師』どの？」

「何だ、解かっていたのか」

男は苦笑するように肩を竦めて見せる。

「まあね、報告書であがってきたのと同じ色の髪と瞳だし、情報にも長けてるみたいだから」

ソルデイスはそれだけ述べるとゆっくりと椅子から立ち上がり、彼の前に手を差し出した。

「ソリユート・アドラムだ。ランズール隊の副隊長でここの警備を任されている」

「フレイル・ファードだ。今回は名将とも名高いランズール卿の右腕くんの手腕を見せてもらうよ」

握手をした二人に回りの男たちはにやりと笑い、任せとけとばかりに作戦本部となっている部屋を出て行った。

「いい部下だなあ」

フレイルは彼らの表情に『ソリユード・アドラム』に支持する誇りを見せ付けられて、思わず口笛を吹いた。

「ランズール卿の隊だからね。確りと命令を理解し、更にそれを自分の中で昇華してあらゆる場面に対応する判断力を持ち合わせてる」ソルデイスはそういうと、机の横に立てかけてあった剣を帯剣し『いってくる』とばかりにフレイルに手を振って見せた。

一人、部屋に残された彼はもう一度机の上にある地図を確認して、少し人の悪い笑みを浮かべた。

「さてと、お手並み拝見としますか」

彼は誰も居ない空間でそれだけ呟き、地図の中で見つけた地点に一人向かった。

辺鄙な村の戦いの先陣を切ったのはソルデイス側の部隊だった。

奇襲部隊に対して奇襲をかける形でソルデイスを先頭とした部隊が切りかかった。

突然の攻撃に奇襲部隊は隊列を組むことが出来ず、兵の1/3が屠られた時点で蜘蛛の子を散らすように四方八方へと逃走を開始した。それに驚いたのは街道を進んでいた本隊の兵士だった。奇襲部隊が切り崩され逃げ惑う姿に、更なる伏兵を懸念し始めた。足並みが浮き波立ったところで、村の前に構えていた部隊がトラント卿が仕掛けていた伏兵に対して矢の雨を降らせてきた。突然の攻撃に、彼らはパニックに陥り、ソルデイスの部隊が近づいてくる前に本隊へと向かって咆哮をあげて切りかかっていった。

「今回も、副隊長の予想通りだな」

マキシムは隊列も組まずにばらばらに攻撃を仕掛けてきた男達の姿にわざとらしく溜息をついてみせると、馬上から槍をその部隊の先頭の男に投げつける。

「それだからこそ、我らの副隊長でしょ」

グレッグは誇らしげに言うと言の剣を抜き、馬を走らせ始めた。

マキシムも「それもそうだ」と笑い、傍に控えていた武器補給の歩兵から愛用の槍を受け取る。

「さあ、奇襲部隊を買ってくれた副隊長に手柄全てを奪われないうちに、奴らを叩き潰すぞ！」

マキシムの言葉に周りの兵は大きく拳を突き出すと、死に物狂いで向かってくる男に向かって逆に切りつけていった。

## 第五話：軍師の名前（後書き）

温泉街を守るための戦いが始まりました。

そして、やっと軍師の名前が登場しました。

名前を出すまでって『彼』とか『男』とか面倒くさい表記をしなきゃいけないので、さっさと名乗らそうとしたんですが登場から3話目でやっとってどうよ、と自分でも思っています。

## 第六話：先を読んだ者

マキシムが率いている本隊が動き出す音に反応してにソルデイスは奇襲部隊への攻撃を止めた。

彼は逃げ惑う兵たちを深追いしないように指示を出す。と進軍する方向を変え、二つ目の伏兵が潜んでいる茂みの裏から一気に切り込んでいく。

驚きのあまり武器の準備も出来ぬままに次から次へと兵が切り伏せられる。それも狙い済ましたようにその部隊の中核となる人物ばかりを狙って、ソルデイスの剣は息の根を止めてゆく。

残る兵は、頭脳となる人物を失い、烏合の衆が如く四方八方へと茂みから飛び出してゆく。

周りを確認もせず飛び出してきた敵兵を、弓兵達は確実にしとめていく。

「伏兵と奇襲部隊の敗退で、本隊の足並みが落ちてくれると助かるんすけどねえ」

ソルデイスの横でプライムは苦笑しげに口を歪めながらぼやいて見せた。

奇襲部隊ごときの数の相手ならばこちらの被害はそうないだろうが、本隊同士がぶつかればそう簡単には事はすまないだろう。

一番早い馬をクローリーとウエネットにあてがって使者に立ててあるが、援軍がつく時間は準備の期間を合わせて考えて、どう早く見積もったところで7日ほどかかるはずだ。

それまで本隊が到着しなければ・・・陣を構えてこちらを燻す作戦に出てくれれば、こちらの勝ち、

だが、そのまま突っ込んできたら・・・

(副隊長の顔に泥を塗る真似だけはしたくないな)

この村に留まる兵たちは隊長であるランズールは勿論、この年若い副隊長にも多大な恩を感じていた。

そして、彼を守るためには何としても……命をかけても惜しくないぐらいは思っている。

「敵の本隊は足を緩めないだろうね。彼らも俺たちが使者を放っているのはわかっているはずだ。奇襲ともいえる総攻撃を成功させ、ここにいる部隊を駆逐するためには容赦はしてこないだろう」

ソルデイスは面白くなさそうに近場の兵を切り捨てながら呟いた。「だけど、手は打ってある。4日前に出した使者がどこまでやってくれているかが勝負の分かれ目だ」

ここから狼煙をあげる物見台までは1日もなく到着できる。それを見て、ランズール卿とオージェニツク卿がどれほどの速さで着てくるのが本当の勝負の分かれ目になるはずだ。

「いつのまにそんなの出してたんです？」

プライムは目を丸くしながら隣にいた自分よりも身体の小さな副隊長を見やった。

「ここ数日、バニツシュが居ないのはそのせいだよ。兵を行かせるわけには行かなかったからね。俺からの書状を渡して物見台に行かせた。報酬は『本屋のキャシーを紹介しろ』だそうだ」

バニツシュはこの村で何でも屋みたいなことを商っている青年だ。すばしっこさが売りで、情報収集から犬の世話まで何でも引き受けられる。

「キャシーか……マキシムの奴が目くじらを立てるんじゃないっすか？」

本屋のキャシーはマキシムの年の離れた妹だ。彼は彼女のことを目に入れても痛くないほどに可愛がり、自分のお眼鏡に叶わない青年が彼女に近づこうとするのを悉く排除していた。

現在、彼女に近づくと『許可』がおりているのはこの目の前の副隊長のみだ。

「紹介するだけさ。交際するかどうかは俺の知ったことじゃないし。それにその後、マキシムにも紹介した旨<sup>むね</sup>を伝えればどうにかなるだろう」

しれつと宣まうソルデイスの言葉に周りの兵は苦笑してみせる。本当にこの年若い副隊長は食えない人物だ。

「それじゃ、今度、俺が報酬を要求するときは仲を取り持つてくれと頼みますよ」

二人の会話を聞いていたザックはおどけた口調でウインクをする。

ソルデイスはそんなザックのそばに一気に詰め寄ると、彼の周りにいた敵兵2人を瞬殺する。

「よそ見していると怪我するよ。そんな相手に女性を紹介するなんてできないな」

「あいいい・・・」

ザックは肩をすくめて見せると、自分の役目を済ませるために敵の荷駄の元に駆けていく。

陣形を崩されただけでなく、荷駄まで奪われるわけにはいかない。敵も必死に応戦してくる。あまりの抵抗に苦戦の色をにじませるザックをフォローするようにソルデイスとプライムは倒れている敵の弓兵から武器を奪い、的確に力を削いでいく。

「本隊まで後退せよ！」

ソルデイスの軍の猛攻に、荷駄を守っていた将が苦渋の決断をする。その声に、敵兵たちはいち早く反応すると我先にと本隊がいる方向へとかけていった。

「これで、とりあえずこちらの作戦は一旦終了だな。荷駄の検分の後、次の作戦に入るから少しの間休憩してくれ」

ソルデイスは少し息の上がつている瓶子達に指示を出すと剣を鞘に収め、村の方角へと視線を向けた。

(さて、あつちはどういふふうに動くかな)

誰にも気づかれないように口元をゆがめると、彼は今手に入れたばかりの荷駄を検分するためにザックの元へと歩いていった。

## 第六話：先を読んだ者（後書き）

先を読む者、要するにソルデイスのことです。  
彼は5日ほど前にすでにある程度の情報を得て、先手を打っています。

あまり地形のことを考えずに文章を考えたので、一度、紙面に地図を引いておかしい所を修正したいとは思いますが。

## 第七話：村の過去

フレイルが地図で確認した場所まで移動すると、そこにはすでに兵が配置されていた。

「あ、やっと来ましたね」

彼の姿を見つけて、年若いビクターが親しげに声をかけてきた。

「何だ、俺がここに来るって読まれてたのか」

フレイルはおどけるように首を竦めると、兵の配備を確認する。だが、彼らはただ整然とそこにいるだけで布陣というほどの配置についていなかった。

「アドラム副隊長から伝言です。兵の布陣、指揮はあなたに任せる。お手並み拝見、だそうです」

「あらら」

フレイルは感嘆するようにそう呟くと、この中の指揮的な存在と思われるビクターの元へと歩を進める。

「それじゃ、おたくらの大将に高く評価してもらったためにも、俺の言つとおりには布陣を引いてくれる？」

軽口のようにウインクをしながら彼は問い掛けてくる彼に、ビクターを始めとする隊の人間はにやりと笑ってみせた。

フレイルの布陣は実に見事だった。

兵士の実力の高さを鑑かんみた上で、弓兵を伏兵として4箇所以待機させたうえで敵が打って出難く、更にこちらからは複数の兵で対応できるように歩兵を配置した。トラント側の奇襲部隊は、伏兵に気付く事無く、ビクターたちの隊に襲い掛かるうとし、次々に先鋒をくじかれる形となり、僅かの時間で撤退を余儀なくされた。

「追いかけるのか？」

然程、こちらの戦力に被害がなかったことでビクターはフレイルにそういつてみたが、彼は小さく笑って首を横に振った。

「向こうもそれを狙っているさ……下手に出て行けば、他の部隊と合流して再度切っ先を変えてくる可能性もある。そんなことをすれば、あんたたちの副隊長が引いた作戦に支障をきたすことになりかねない」

ソリユードの名前を出されて、隊の人間たちは渋々彼の意見に従う。そんな彼らにフレイルは目を眇めてみせる。

「お前さんたちは、本当に副隊長が好きなんだな」

「当たり前だ！」

フレイルの言葉に打てば響くような速さで答えたのは弓兵隊を率いていたビージェットだった。

「俺たちはランズール卿は勿論、副隊長に返せないぐらいの恩義があるんだ」

ビージェットの言葉にその場に居る若い兵たちがうんうんと、首肯する。

「この村を守る兵は、副隊長補佐のマキシムを除いて、全員が元々この村の自警団の人間だ。まあ『自警団』といっても、農民・商人の寄せ集まり、死に体で盗賊にぶつかっていく間にランズール卿に助けを求めるのが俺たちの役目だった」

ビクターはフレイルに語りながら、ソリユードが来るまでの村の様子を思い出していた。

あの頃は、今よりもずっと治安も悪くて、盗賊たちが来るたびに多大な被害を村は蒙っていた。自警団に入る若者はその命と引き換えに村を守るのを役目とし、村には夫や家族を失った悲しみがいつも満ちていた。

そんな時、妹を連れて長い間修行の旅に出ていたマキシムが村に戻ってきた。

彼は村の現状を鑑みて、ランズール卿に村に常駐してくれる騎士団を派遣してくれるように頼んでみてはと村長に提言した。

しかし、村の人間は中々いい顔をしなかった。

かつて、それで来たランズール卿の甥、フライアンテ卿が盗賊よりも酷い統治をこの村に引こうとしたことがあったからだ。結局、あの時は内緒で現状視察に来たランズール卿により、フライアンテを解任させることで事なきを得た。

村の人間はそのことを思い返し、また同じ事が繰り返されるのではと危惧したのだ。

最初のうちはマキシムもそれで納得し、彼自身が自警団に入り守ろうとしていたが結局、一人対多数では村を守りきることなどできず、マキシムはランズール卿に直談判しにオージエニツク卿が治めるベネシエンドへと向かった。

一抹の不安とともに、村人たちはマキシムの帰還を待った。

そして、彼が戻ってきたときに連れてきたのがまだ14歳の少年だったソリユード・アドラムだった。

## 第七話：村の過去（後書き）

フレイルの策での戦闘はあっというまに終了です。

別に、もう戦闘シーンが書きたくないとかではないですよ（自滅）  
後半は村の辿っていた過去&ソリユードがこの村に来たいきさつで  
す。

隊の人間が「フライアンテならトランド卿と手を組みそう」と思っ  
たのは、村人が彼の性格を熟知していたせいです。

## 第八話：村人の昔話

マキシムが連れてきた少年に自警団を筆頭とする村人たちは落胆した。

聴けば、ランズール卿がいたく気に入っている少年でベネシエンドでも特別扱いを受けていたという。

これではフライアンテの時の二の舞だとみんなが思った。

しかし、その予想はいい意味で覆された。

ソリユードはとりあえず、自警団の技量を見極めると彼らにあった武器と役目を与え、剣術を教え、戦術をその頭の中に叩き込ませた。みるみるうちに自警団の力は増し、自警団から兵団、騎士団へと格上げされていった。

更に、彼は自警団に所属していない村人たちにも村を守るための術を教え、更には物見台の設置や伝令のための道の確保など、あらゆる部分でその能力を発揮した。

村はたちまち治安を取り戻し、今では年若い副隊長の手腕に疑念を抱くものなど居ない。

「今、村を守る存在としての自分たちに俺たちは自信と誇りをもっている。そしてそれを与えてくれた副隊長には返せないほどの恩義を感じている」

真剣に語る二人の姿にフレイルは微笑ましいものを感じた。

あの王宮の中で心を閉ざし、常に笑顔を保ち続け、誰にも真実の姿を見せなかった時分に比べると、今のこの環境は彼にとって良いものに感じる。

「ビクター！副隊長の部隊がこっちに戻ってくるぜ！！」

物見台を守っていた兵士が報告してきた内容にビクターたちはそつと胸を撫で下ろした。しかし、逆にフレイルは眉間に皺を寄せた。

「早すぎる帰還だな・・・もしかしたら、村長たちを呼んでおいた方がいいかもしれないぞ」

ビクターはその言葉を聞き首を傾げたが、とりあえず、副隊長である少年が『どんなことでも彼の指示に従え』と命令を下していたのですぐに村長へと使者を出した。

ソルデイスが村につくと苦笑いをしたフレイルと何事かと心配している長老たちが隊を迎えてくれた。

「どうかしたのかね、ソリユード」

急に呼び出されたことに不安を感じたのだろう。長老の中でもまだ年若い部類に入るゼントが年齢の割には背の低いソルデイスに視線を合わせて問い掛けた。

ソルデイスも厳しい顔つきのまま、長老たちの顔を見回した。

「とりあえず、奇襲部隊だけは退けました。しかし本隊がたどり着けば、人数の差が歴然となります。前に提案した通りに、非戦闘員は持てるだけの財産をもって例の場所に隠れてください」

少しの焦燥を含んだ言葉に、長老たちは顔色を悪くする。

「どれぐらいになるのかのお」

今度は一番の年長者であるブレンダルが尋ねてきた。年老いた顔には焦りの中にもきちりと状況を理解しようという意志が見て取れる。かつて何度も夜盗により蹂躪を受けてきた村だ。その時は何も出来ず物陰に隠れることしかできない状態だったが、今は違う。村を、村民を守るための術は目の前の少年により与えられている。それが、長老たちの気持ちを引締めていた。

「2〜3日ぐらいと見ています。5日たっても部隊の人間がいかなかったら、奥の通路から逃げてください」

「わかった」

長老たちは深く頷くと、それぞれの分担に合わせて散っていく。最後に残ったブレンダルはソルデイスをじっと見つめ、諭すように言葉をかけた。

「ただ、無茶はしないでくれ。財産は私たちが責任をもって守る、自警団の人間たちも、命を無駄にせず生きて再会えるように心がけてくれ」

真剣に『自分』という人物の安全を気に掛けてくれる大人にソルデイスは少しだけ寂しそうな顔をしてから、言い聞かすようにブレンダルに告げる。

「大丈夫です、俺は結構長生きするってわかってますから」

「心強い台詞じゃのう」

ソルデイスの言葉を自分たちを安心させるための言葉と受け取った彼はにっこりと笑うと先に村へと戻っている長老たちと同様に隠れるための準備をするために踵を返した。

(『本当の未来』を言っているんだけど、な)

ソルデイスは心の中でそう呟くと、今度はフレイルの方へと視線を向けた。

## 第八話：村人の昔話（後書き）

すごく久しぶりのUPとなってしまうました。

物語の流れは決まってるんですけど、此処の辺りの経過を決めてなかったなので、どうも書くのが遅れてしまいがちになってしまいます。とりあえず、ソルデイスがこの村に来た経緯と、なんでこんなに好かれているかの説明です。

現在の彼は笑わないのにどうしても『笑う』っていう言葉を使いそうになってしまいました。

## 第九話：夜陰の奇襲

ソルデイスとフレイルの読みの通りに奇襲に失敗したトラント卿の部隊は村から距離を置いた場所に陣を張り始めた。

後続の部隊の到着を待ち、一気に攻め込んでくる予定なのだろう。

「今度はこちらから奇襲を仕掛けるのはどうですか？」

「いい手ではあるけど、村の防衛の方に致命的な隙ができてしまう」  
グレッグの意見にソルデイスはまだ少し幼さの残る顔を曇らせる。

先程追い払った伏兵部隊と、無傷の状態の本隊、計2300の兵がこの土地へと攻め込もうとしている。

地の利は少しだけこちらに有利に働くが、先程の伏兵の中に紛れ込んでいたような盗賊のような傭兵が多数居るとすれば、あまり優位に考えるのは危険だ。

更に言えば、こちらはソルデイス・マキシム・フレイルを除いて剣を持ち始めてからまだ2年ほどの経験しか積んでいない。人を殺しなれている傭兵とそれらを比べるとやはり戦力の差が歴然としている。

かといって、ここで敵に投降したり村を廃棄することは避けたい。

(フライアンテ卿はそちらを狙ってるだろうけど)

ランズール卿から預かっている土地を放棄して逃げ帰れば、それだけ『ソリユード・アドラム』の評価は下がる。もしかしたら、トラント卿と裏で取引があり、ソルデイスが引いた後に『颯爽と村を取り返す』手はずが整っているかもしれない。

「近隣の村に力を借りることは出来ないのか？」

フレイルは地図の中にある近場の村の数個に印をつけた。

「援軍って言うか……手伝いのお願いはしてあるよ。たぶん、それで明朝からの戦いはどうにかなるかと思うけど」

ソルデイスは難しい顔のまま地図上の敵陣の周りの数箇所を指し示した。

近隣の村に助けを求めるための狼煙はすでに上げてある。

それに対してどれほどの村が答えてくれるかは不明だから、それを当てるのは危険かもしれない。

「夜の間、できるだけ仕掛けをしておいて戦力を削ぎましようか？」

夜陰にまぎれての強襲の仕方はマキシムとソルデイスの二人が自警団に一番最初に教えたことだ。

戦いは兵士の人数だけで勝敗が決まるわけではない。

作戦と地の利は勿論のこと、荷駄の確保や士気の持続でも決する。極少数の兵しか持たないこの村では一番有効な手段だ。

「とりあえず、向こうの荷駄の位置の確認して燃やしておこうか」「それが一番の手だろうな」

とりあえず出来ることだけでもしておかないと、長引く戦はこの村の自警団の人間には向かない。

ソルデイスとフレイルの意見が合った所で、その場の全員が一齐に立ち上がった。

「副隊長、その役目、あなたには行かせませんからね」

「あ？」

フレイルを除く全員が口を揃えての宣言にソルデイスはあんぐりと口をあけた。

それから跋の悪そうな顔でみんなを見ると頬を指先で掻きながら反論を試みる。

「いや、俺、まだ行ってくつて言っていないけど……………」

確かに自分一人で行くつもりだったが、どうしてみんなにはれたのか。

そんな事を思っていると弁えたようにマキシムがわざとらしい溜息をついた。

「誰が『やる』と指示が無い場合はいつも自分でやってしまうのでしよう」

「……………確かに、そうだけど」

的を射た指摘にソルデイスは困ったような顔をする。無表情でもこ  
ういう時の表情かおだけは解かりやすい。

マキシム達も副隊長ソルデイスの考えていることは解かる。

これはすごく危険な任務だ。生きて帰ってこられる確率は低い。

だからこそ、今、この村の総大将たる彼を行かせるわけには行か  
ない。

周りの気持ちもわかるのか、ソルデイスは困惑しながら回りに視線  
を巡らす。

と、そんな彼の様子を楽しそうに観察しているフレイルと目が遭っ  
た。彼はソルデイスに笑顔でうなずいて見せるとトントントと指先  
で机を叩いて見せた。

「その面白い役目、俺に託してみない？」

軽い口調で問い掛けるフレイルにその場にいた全員の視線が集まっ  
た。

## 第九話：夜陰の奇襲（後書き）

田舎の村のいざこざがいつまで経っても終わりません。

もう、さっさと終わらせたいのに……というのが本音です。戦とか、作戦とか、書くの本当に苦手なんですよ。

このいざこざさえ終われば、暫く、クラウド側の話に移行します。

あちらは戦事が少ないのもう少しちゃっちゃと勧めれると思います。

## 第十話：軍師の手並み

フレイルの案に難色を示したのは誰でもないソルデイスだった。

そんな彼の顔色を読み、フレイルは更に言葉を繋げる。

「そりゃ、突発出の俺が行くのは作戦として心配かもしれないけど、誰か俺よりも強い人間を見張りに着けて潜入させるとかすりゃいいだろ？」

彼の言い分はちゃんと筋が通っている。

そうなれば彼よりも強い人物の選定となるが、ソルデイスが行くことを止められている以上補佐のマキシムが彼に付き従うことになる。ソルデイスはフレイルとマキシムの顔を少しの間眺めると、小さく息を吐く。

「わかった。それじゃこの作戦はフレイル殿に任せる。彼と行動するのはマキシム、あなたにお願いする」

やっと出た承諾に、フレイルを含めた周り全員が胸を撫で下ろした。ここで更に駄々を捏ねられたらどう対処したらいいのか分からなかったからだ。

フレイルにとつてみれば自分はぽつと出のよそ者であるし、他の者に取ってみれば一番幼いとはいえソルデイスがこの中の最高指揮官だ。唯一言い返せれるだろうマキシムは副隊長の後見人であるランズル卿よろしくソルデイスに対して非常に甘いのだ。

強く出られるといつも彼の言うなりになってしまう傾向がある。

「それで後誰を連れて行くの？」

潜入作戦にしても人数が少なすぎる気がする。更に陽動まで考えているなら明らかに人手不足だ。

だがソルデイスの問いにフレイルはにいつと笑ってみせると、

「二人ぐらいでやるから意味のある陽動もあるんだぜ？」

と不敵に言ってみせた。

宵闇の中で部隊は刻々と規模を膨らませていた。彼らも食料の焼失を恐れているのか補給のための荷駄は数箇所に分けられていた。

フレイルはマキシムの誘導のもと部隊がすべて見える場所まで辿り着くとじいっとその隊編成を確認してゆく。

「なあ、お前さんってどれぐらいに強い？」  
視線を隊のほうに向けながら彼は後ろに控えているマキシムに問いかけた。

「副隊長には及びませんが、ガイフィード卿の元にいるグレイと同じぐらいの腕前だと自負しています。彼とは同じ師匠のもとで修行しましたから」

その言葉にフレイルは驚きの目で彼を見た。

だが彼は自分の言った言葉の意味が分かっていないのか『それがどうしたのだ』という視線で彼を見つめている。

（なるほど……クラウス王子の兄弟弟子ね。そのこと、ソルデイス王子は……知ってるだろうな）

彼の過去見の能力はある筋から聞き及んでいる。ならば彼の過去に自分の兄クラウスが関係していることなどつくに承知しているだろう。

「てえことは、あの剣聖としても知られるハーブリット老の弟子か。それじゃ期待してる」

フレイルは何とか自分の考えを誤魔化すと彼のほうに向けて包みを差し出した。

「フレリア・ルレ炎起玉だ。だが従来のものと違ってこれは強い力で斬りつければ斬りつけるほど時間を置いて爆発するように改良されている。もちろん、爆発の威力も同じように比例して大きくなる」

フレイルは包みからひとつ取り出して地面に置くと持っていた刀で小さくつつく。

それと同時に玉は小さな音だけ立てさほどの威力もなく爆発した。

「とりあえず適当な荷駄に近づいて潜伏してくれ。そして俺が一目を爆発させると同時に一つ目を確実に斬り付けて次の荷駄へと向かってくれ」

再度差し出された包みをマキシムは受け取ると、視線を隊編成が終了しそうな敵軍へと向けた。

「これは人数が多いほうが陽動になるのではないか？」

各自いつせいに荷駄に仕掛けて逃げるほうが作戦としては成し易いはずだ。当然のようなマキシムの問いにフレイルは苦笑してみせた。「いや、多いと逆に気づかれる可能性が出てくる。あっちにいるのは騎士か傭兵だ。あんたぐらいの人間なら紛れ込めるが、副隊長ぐらゐの年齢の子供や人のよさそうな他の連中だと却って浮いちゃうんだよ」

あの部隊の中でこの中に潜入しても気づかれないのは彼ぐらいだった。他の人間は明らかにまだ『騎士』としての規律のある動きができていなかった。もしソルディスがマキシムを指名しなくてもフレイルは彼を潜入作戦の要員として指名するつもりでいた。

「褒められているのか迷う言葉だな。俺も前まではあっちの連中と同じ顔をしてただけど」

「どっちでもいいだろ。とにかく、村とあの少年を守るために互いに死力を尽くそう」

フレイルは自分の分の炎起玉の入った袋を腰に括り付けると「それじゃ、先に行く」と残してするりと部隊のほうへと進んでいった。

マキシムはそんな彼の後ろ姿に「副隊長を守るのは我々ですよ」と嘯うそいてみせるとさっさと潜入するために彼とは反対側の方向へと向かった。

## 第十話：軍師の手並み（後書き）

やっと陽動作戦開始になりました。

潜入組みはフレイルとマキシムです。

マキシムは周りには隠していますが貴族としての地位を持っているので、騎士や傭兵に紛れ込むことができます。

## 第十一話：炎の陽動

ランクビット村から少し離れた場所に陣を構えたトラントは苛立ちを隠さず、自分の部下たちを睨みつけていた。

「あの村を束ねているのは16歳ぐらいの子供だから容易く攻略できると豪語したのはお前らではなかったのか？」

野盗のごとき奇襲と、ある程度の先遣部隊を率いたのに単なる村人に負けて帰ってくるなど彼の考えではありえないことだった。

更に言えば、指揮しているのがあの智将とも名高いオージエニツクの腹心ランズール卿ではなく、それに目を掛けられているとはいえまだまだ子供の少年だというのだ。はつきり言って敵を舐めてしまったばかりに遅れをとったとしか彼には思えない。

「しかし、あの密告の内容とはことなり村人は統率を持っているのも確かですぞ」

進言をしたのはトラント卿の部下の中でもまだ戦略を練れる部類に入る老将だった。

「やはりフライアンテ卿が齎もたらした情報は偽者で、すでにランズール卿は村に入っているのではないですか」

老将の言葉を受け、部下の一人が不満を漏らした。

自分たちが負けたのが少年だと認めたくないのだ。それならば先にランズール卿が到着して自分たちを負かしたと思うほうが気も楽になる。

「こちらの間諜の話では2日前までランズール卿はまだベネシエンドにおるのは確認しておる。自分の失態を軽くしようと思うな」

トラントは不満そうな部下に鼻白みながら忠告すると机の上に広げられた地図を眺めた。

確かに先見隊での奇襲は失敗に終わったものの、本隊はまだ無傷だ。今の状況なら敵がどれほどの策を練ろうともこちらに敗北する要因は無い。あとは時間だ。時間が遅れれば遅れるほど、今度は後方よ

リベネシエンドからの援軍がやってくることになる。

それまでに村を押さえて、自分たちの要塞とすれば向こうも手出しできないはずだ。

「それにしても、16歳の少年とは、な……」

かつて自分が敷いた王城の包囲網を簡単に抜けて逃走した王子と同じ年齢ではないか。

あの時、自分は完璧な包囲網を引いたのに、唯一ディナラーデ卿が管轄した正門よりソルディス王子たちは逃げ出したと聴く。

すべてを自分に任しておいてあったならば、そんなことにはならなかったはずだ。

（時守を利用して関を作ったというが、そんな生ぬるいことなどせず十代ぐらいの子供を皆殺しにしまえばよかったのだ）  
そうすれば今のようにどこに潜伏しているかわからない王子に手をさくこともなかっただろう。

しかしそれは今考えても詮無きことだ。

今は目の前の村を落とすためにどうすべきかを考えるべきだろう。

とりあえず、昼間の奇襲は失敗だったが、相手を疲弊させるには十分の働きをしていると思われる。ならば夜も人を割り、村を襲わせたいほう也得策だろう。

「とりあえず……」

ドオオン……！

トラント卿が深夜の奇襲について指示を出そうとした瞬間、天幕の外で爆発する音が響いた。

唐突な音に天幕の中がざわめく。末席にいたものが様子を見に行くために立ち上がるうとしたまさにその時、血相を変えた兵が天幕の中へと駆け込んできた。

「敵、奇襲ですっ！荷駄が燃えております」

「なんだとっ！」

その報告にトラントを始めとする将達はいきりたった。

荷駄の影で陣の様子を窺っていたマキシムはそのときを息を殺して待っていた。

トラント軍の荷駄は大小あわせて8箇所に分布しており、それぞれ荷駄の無事を守るために警備が立っていた。

不意に自分がいる場所と少しだけ離れた場所で大きな音がした。

そして立ち上がる炎と煙、それに驚いた荷駄の警備兵は2人を残し炎が上がるほうへと様子を見に向かう。

マキシムはそんな兵の様子に口角をあげた。

見張りの人数が減ればそれだけ死角は多くなる。更に残された見張りももうもうと立ち上る炎に視線を取られており、自分たちが守るべき荷駄への警戒が緩まっている。

彼は更に荷駄の乗る馬車へと近づき、鋭い一閃で受け取っていた珠に傷をつけた。そしてそれを静かに馬車へと転がす。

(よし……)

転がした玉は見張りに気付かれずに馬車の下へと転がった。とりあえず同じように後2個ほどきりつけ同様に転がすと、彼は爆発を確認せずにその場から離れた。

## 第十一話：炎の陽動（後書き）

殆どトラント卿の独り言みたいな回でした。

やっと夜陰にまぎれての奇襲が開始です。まだまだ主人公が出てこないまま話が進みます。

## 第十二話：内部崩壊への布石

二個目の荷駄より大きな炎が上がった。

一つ目の時と同様に立ち上る炎に軍の内部がざわめき立つ。

(こうなると、人の顔なんて確認している余裕がなくなるんだよな) フレイルは動揺している傭兵の中に紛れ込みながら、立ち上る炎を見ていた。

「おいおい、こんなことになって俺たちへの報酬はちゃんと貰えるんだろうなあ」

炎を見つめて呟くフレイルの言葉に回りにいた傭兵が急に慌て始めた。

「そうだぜ、まだ戦ってないからいいよなものの燃えてないから今回の報酬が減ったじゃやっつてられねえぜ」

フレイルの言葉に呼応するように周りの人間が次々に不安を口にする。

元々傭兵など報酬だけが目当ての人間なのだ。こんな目の前で戦う前に燃えていく荷駄を見せ付けられれば戦う意欲が半減する。

それでも襲う場所が裕福な場所ならばそこから奪ってやろうと考えるが、目の前にある標的はどう考えてもそれほど金を溜め込んでいるようには見えない。

「なあ、ここまでの駄賃分貰ってさっさと散ったほうが得策じゃないか」

傭兵の一人が言った意見に周りの傭兵達も順々に傾いてゆく。

その姿にフレイルは誰にも見られないようにニヤリと笑った。

烏合の衆はその心の拠り所よとなっていているものがなくなれば解体するのも早い。

「とにかく見張りの少ねえ荷駄ぶつを探して報酬を貰うとするか」

その声を合図に傭兵達は襲うべき荷駄を物色するために散っていく。フレイルもそれに同行するように見せかけその場を離れた。

3つ目の炎を上げる仕掛けをし、少し離れた場所についた時点でマキシムはふうと息を吐いた。

これで自分の役目は終了だ。後はこの場から速やかに離れるだけだ。貴族所有の騎士団だけあり統率が取れているように見えていたトラント卿の陣営は、その実、傭兵達と既存の兵士たちとの間に軋轢があるようで兵士がマキシムの顔を見ても『また新参者の傭兵か』とばかりに鼻白むだけだった。

(こうなるとあの軍師の策略もあたっているということか)  
確かにこの兵の中では村の純朴な青年たちでは違和感があるし、年若い副隊長は割る目立ちしてしまう。

「おい！」

少し考え事をしていたマキシムに声をかける人物がいた。

振り返るとどうやら既存の兵と思われる人間がこちらを睨んでいた。

「まさかこの騒ぎ、お前らが仕組んだんじゃないだろうな」

一瞬、どきりとしたが彼のいう『お前ら』というのがこの軍に在中する傭兵を指しているのだとすぐに理解したマキシムはぶんぶん大きく首を振った。

「まさかっ！俺たちの報酬の入った荷駄を燃やす馬鹿がいたら俺たちがたこ殴りにしてやるぜ」

出来るだけ粗野な口調で否定する言葉を吐いたマキシムに兵士たちも「それはそうか」と納得したようだった。

どおおおんっ！

タイミングよく、先程仕掛けた3つ目の珠が大きな炎を上げた。

「なっなんだ！また爆発っ！」

慌てふためく演技をしているマキシムに兵士たちは「まだ戦場にな

れていないのか」と勝手に判断したようで小馬鹿にするような視線を投げた後、炎を上げている荷駄に向かって走っていった。その場に残されたマキシムは炎と爆発に脅える新参者の傭兵を演じながら、夜陰へとその身を翻したのだった。

最初に陣を見下ろしていた場所まで戻り、フレイルは少しだけ胸を撫で下ろした。

眼下では予定通り三つの炎が上がっており、少なからず陣内で小競り合いまで起きている。奇襲としては成功に入るはずだ。

後はマキシムが戻るのを息を潜めて待つだけだ。

そのマキシムもそれほど待たずして姿を現した。とりあえず回りに気配を配りながら近づいてくる姿にフレイルも肩の力が抜けた。

「大成功、だな」

「そうですね」

ぱんつとハイタッチをした二人の顔ににんまりとした笑みが起きる。互いの無事が確認できたら後は自分たちの陣営まで戻るだけだ。もちろん、この霍乱をこちらの陣営の奇襲だと理解して帰り道に兵を配している可能性は否めない。

気を抜くにはまだ早い。

「さてと、どの道が一番……」

「お疲れ様、無事で何よりだ」

撤退の経路を模索し様としたフレイルの言葉を遮って少年の声が響いた。

マキシムには聴きなれたその声の主は怪我一つしていない二人の様子に安堵の表情を浮かべて近づいてきた。

## 第十二話：内部崩壊への布石（後書き）

フレイルが狙っていたのは荷駄を燃やすことではなくそれによって起きる内部のいざこざでした。

そしてやっと最期に主人公が復活です。

それにしてもこんな小競り合いが十話以上も続くとは思いませんでした。さっさとこの戦いの話を終わらせて話を展開させたいです。

### 第十三話：主君の思惑

「副隊長っ！」

現れたその姿にマキシムは声を殺しながら……だが精一杯の驚きを乗せてその人物を呼んだ。

フレイルはある程度予測していたのか「ああ、やっぱり」とばかりに頭を抱えている。

「逃走経路だけはちゃんと確保しておかなといけない」

ソルデイスはそういいながら刀の先で自分の後方を示した。

「だから経路確保<sup>そつじゆう</sup>のは他のやつにやらせるよ」

フレイルのぼやきにソルデイスは心外そうに首を傾けた。

「俺が一番確実なのに、なんで他の人を危険に曝さなきゃいけないんだ？」

（ああ、こういう人だった）

何がいけないのか全く理解できていない少年に年長者二人は重いため息をついた。

この人は絶対に自分を大事にしない。一番に自分の懐の中にいる人間の命を優先する。その上、その人たちが彼のことを心配していることを理解できないのだ。

今回だってフレイルが名乗り出なければ、周りがどれほど止めようとも自分一人で敵を攪乱しに行っただろう。

そして今もたった一人で二人のために逃走経路の確保をしていた。

（たまには頼ってくれてもいいのに）

それは村人全員の心の声だった。

ほんの少しでも少年の負担を減らすことが出来るのなら、自分たちはどんな困難なことでも成し遂げる意力はあった。

「それよりものんびり出来ないから。お小言は後で貰うよ」

ソルデイスはそれだけというと二人に背を向け茂みの中へと入っていく。

フレイルとマキシムは互いに視線を合わせもう一度ため息をつく、少年に遅れないように村への帰途へついた。

フレイルの画策どおりにトラント軍の傭兵たちの指揮はこの攪乱により著しく落ちていた。中には見張りの少ない小型の荷駄に集団で襲い掛かり金品を持って逃げようとする者まで現れる始末だ。

「これだから用兵は信用できぬのです」

炎の攪乱が一段落し、傭兵たちの内乱も一応鎮圧した後、将たちは再びトラント卿の天幕へと集まった。

「反乱を起こしていない者も、報酬が貰えぬなら去ると言い出しております」

「いつそ彼らの力など借りずとも我々だけであの村を落とせばいいではないですか」

口々に進言する部下たちにトラントは鼻白んだ表情で答える。

「小僧があゝの村を守るようになってから過去2回、そなた達が言うように我が軍だけで攻め、陥落したのを覚えておらぬようだな」

自分たちの主君の言葉に部下たちはぐうっと言葉を飲み込んだ。

そうだ、前回、前々回と彼らの言葉を聞き行動して手痛い目があった。トラント軍だとわからないように進軍したから彼の名誉には汚点はないが、それでも失態としての記憶は鮮明に残っている。

さらに今回はトラント自身が率いての攻めだ。子供相手に、単なる村の自警団相手に負けるわけにはいかないのだ。

そのためには捨て駒にも出来る傭兵は必要不可欠だ。

さらには敗戦の原因を彼らに押し付けることも出来る。

「能力の高いものだけ報酬を2倍にすると引くとめよ。なんならばあの裏山に鉱山があることをそれとはなしにばらしてもよい。その他の者は適当な路銀を与えて放逐せよ」

トラントの言葉に天幕の中はざわめいた。

鉦山があることは傭兵たちには内密のはずだった。それをばらせば報酬を更に加算せよと言ってくるのは目に見えていたからだ。

だが部下たちの動揺にトラントはにやりと口角をあげて見せた。

「なに、人数を減らしたほうが最後の時に処理しまっしやすいであろう？」  
もともと多数に集めた傭兵たちに彼は報酬をきちんと与えるつもりなどなかった。この世情、人などどんな物資より簡単に集まるのだ。実際、なんとか傭兵を集めては終わった後に処理してきたが、別段、問題になることはなかった。ようは処理の仕方の問題だ。きちんと一人も逃さずに処理できれば、悪い噂など広がる余地はないのだ。部下たちもそれを理解したのか「それもそうだな」とばかりにトラントの言葉に頭を下げて見せた。

### 第十三話：主君の思惑（後書き）

ソルデイスとトラント二人の主君の考え方の違いの比較でした。

ソルデイスは部下や家族を守ることを優先とし、そのために自分を犠牲にする人間です。

一方、トラントは自分の利益と権力維持のために部下への圧制を引いています。さらに傭兵など騎士でないものが自分と同じ『人間』であると理解していません。

## 第十四話：開戦の朝

翌朝、まだ明けきらぬ内からソルデイス達は陣を展開し始めた。近隣の村へと協力を頼んだ仕掛けの部分は報告により、予定より早く罨が完成しているとの事だった。

「とりあえず、自分たちの軍の罨にひっかからないように」

ソルデイスが眠たそうな視線で兵たちに言うと、彼らは苦笑して見せた。まだ自分たちがこういう戦いに慣れていなかった時に何度となく目の前の少年に迷惑をかけた自覚があるからだ。

「ファード殿は昨日同様にビクターの隊に入ってください」

フレイルはその言葉に了承の意味をこめて軽く手を上げて答える。

「たぶん、今日が正念場だと思う。各自自分の命を大切に村を守りぬこう」

ソルデイスの発した言葉にその場の全員の顔に決意の炎が灯る。

その様子にソルデイスは深く頷き、椅子から立ち上がった。

そしてそのまま振り返らずにドアを出て行く。他の人物も彼に続いて、自分たちの持ち場となる部隊へと合流するために部屋を出て行った。

「それじゃ、俺たちも行きますか」

最後に部屋に残ったフレイルはもう一度地図と罨の位置や方向を確認すると後ろに控えていたビクターに笑いかけた。

夜明け直前の静寂の中、山間の集落の周りで一斉に罨の音があがった。

ソルデイスはその前線に立ちながら相手の傭兵の様子を見ていた。

（あまり、士気が落ちていないな）

大体的場合、荷駄が燃えると金にならないと踏んだ傭兵達の士気は

がた落ちになる。

その辺りが家人として仕えている者と金のみの付き合いの者との差となる。

（余程大きな嘘をついたか、それとも……）

彼はそれを確かめるために傭兵の中でもリーダー格と思える男の傍へと間合いを詰めた。

「なんだっ！こんな小僧まで戦わせてんのか、この村は」

明らかに馬鹿にした口調であしらうように繰り出された切っ先をソルデイスはするりと交すと、返す刃で鋭く相手の身体を叩きのめした。

「ぐはっ！」

もんどりうって崩れ落ちた男の姿に傭兵達は気色ばんだ。

しかしソルデイスは彼らの侮りに目元をすうっと細めると更に次の傭兵へと踵きびすを返した。

少年とは思えない太刀筋に先程まで笑っていた傭兵の顔に動揺が走る。

（こんな話じゃなかったぞ）

おいしい話だと思っただけ自分たちは参加した。報酬もいい、その上、落とすべき村には將軍のお気に入りだというまだ年若い小姓しかおらず、後は村の自警団だけを相手にすればいいはずだった。

それなのに目の前の青年たちは明らかに訓練された動きをしており、自分たちを雇っているトラント軍よりも統率が為されている。

（年若い、小姓……年若い……）

傭兵の一人はそのことを思いだし、目の前で一時的とはいえ仲間となっている傭兵をなぎ倒している敵の少年を見据えた。

「貴様が、村を仕切っている南方將軍の小姓かっ！」

「はあ？」

ソルデイスはその言葉に一瞬、動きを止めて考えた。そして言葉を理解すると同時に顔に青筋を浮かべて著しく不愉快な言葉を発した男へと詰め寄った。

「誰がっ！小姓だっ！第一、俺が仕えているのはランズール卿の方だっ！」

その怒鳴り声に村の自警団と思われていた軍団はぶつと小さく吹き出した。

自分たちの副隊長はその容姿が仇となり、このような誤解を受けることが多いが、本人はあまりそういう誤解を受けることに慣れていないようで誤解の言葉が飛ぶたびにこのように大きな声で反論をする。

言葉を出した傭兵は少年の真剣な嫌悪にまた暫し考え、すうつと右手を上げた。

「おいっ！一旦、剣をひけっ！」

男の言葉に傭兵達は驚きながら、戦っている相手から間合いを取った。

「どうしたんすか、お頭」

どうやらこの傭兵隊は他の個の契約の傭兵とは違い、男がすべてを仕切っているようだ。

「ちよつとこの『小僧』と離したくなつてな」

頭と呼ばれた男はソルデイスの存在を部下たちに顎で示した。

「どうやら、俺たちが貰っている話といろいろと違うようだし、そうなる報酬も怪しいからな暫く、そうさな俺が話し終るまでの休戦だ」

部下たちにそう宣言してから剣呑な視線を向けてきた男にソルデイスもすうつと右腕を上げてみせた。

「みんな、気合を抜かないでおいでくれ、話し合いが終わったらさつき以上に戦う可能性も棄てきれないから」

武装は解除しないまでもソルデイスの部下たちも2、3歩さがって自分と対峙していた相手から間合いを取る。

それから彼は男に視線を戻すと、何の感情も映らない目で彼をじつくりと観察し始めた。

#### 第十四話：開戦の朝（後書き）

奇襲戦から一変してちゃんとした戦の開幕です。

ちよつといろいろな流れがあったため、書き上げていたのにアップが遅れてしまいました。

ちなみにソルデイスはその外見のせいのため、『小姓』とか『稚児』とかいう噂が絶えません。

でも本人には自分が『美形』である自覚がないために何故そんな噂が立つのか分かってないようです。

## 第十五話：一時の休戦

目の前の少年が自分の意思を汲み取ってとりあえず剣を引いたことに傭兵のトップである男は感心した。

やはり自分たちの雇い主であるトラント卿の話と目の前の少年の性質はかけ離れているようだ。これはきちんと読みきらなければ、自分の養っている傭兵部隊を無意味な危険にさらしかねない。

「やっぱり情報はきちんとしたものじゃねえようだな」

戦場いくさばに立つものにおいて敵の情報は少しでも正しいものが必要だ。とくに自分たちみたいに最前線にだされる傭兵に対してはなおさらだ。そういう情報を与えないで戦場に送り出すような雇い主にはやはり高い金を請求しなければならぬし、情報があまりにひどいようならば契約をさっさと破棄して戦場をさる方を選ばなければならぬ。

無論、そういう悪質な雇い主の話題は必然的に傭兵間の情報ネットワークに流される。

「そう思ってくれるなら、助かる。このままこの村の制圧舞台から抜けてくださるともつとありがたいですけどね」

村の防衛の要である少年はそういうと口元だけ笑って見せた。

一方、村の近隣にて敵と対峙していたフレイルも敵の士気が落ちていないことに懸念を示し始めていた。

彼の持ち場に攻撃を仕掛けてきているのは傭兵と騎士団の混合部隊であった。奇襲を受けた翌日だというのに彼らは僅かながらに連携をとりながらこちらを攻め落とそうとしている。

（昨夜の奇襲は概ね、成功だったはずだ）

フレイルは厳しい顔をしながら彼らの心の動向を読もうとした。

いつたいどんな『隠し玉』で傭兵たちの気を引いたのか、それが問題だった。

（この村の資源を餌にするとしたのか？）

前々からこの近辺の山には豊富な量を誇る金鉱脈と銀鉱脈があると聴いている。だがそれを餌にすれば逆にもともの金額よりも割高な料金にて兵を雇わなくてはならないはずだ。

（あのトラント卿という人物の性格を鑑みて、傭兵達にそんな余分を払う人物ではないと思ったんだが）

攻め来る傭兵たちを薙ぎ払いながら考え事を続けていたフレイルはそこではつと気が付いた。

（別に『何』も渡さなければいいのか）

用が済んでしまった傭兵を皆殺しにしてしまえば過剰に請求されている分に加えて、元来、自分たちが正式に支払わなければならない報酬分まで支払わなくてよくなる。

だいたい、傭兵をやっている人間は天涯孤独か、家族がいても長年連絡を取っていないものも多い。もし探しにくる家族がいるとしたら、戦場で死んだことにしてその家族にそれ相応の対応をすればいいだけだ。

（胸糞、悪い話だな）

たぶん、自分の『答え』に間違いはない。だが目の前に向かってくる人間にそのことを訴えても、決して信用されない。逆に怖気づいたと思われて更に攻撃に拍車をかけることになりかねない。

（少しでも信用、ないしは興味をもってくれたら相手の陣に壊滅的なダメージを与えられるのに）

昨日の時点でトラントの策に気が付いていれば、荷駄を燃やすときに火種となる噂として流せれたのだが今となってはもう遅い感がある。

（さて、どうするのかな。あの少年副隊長は）

たぶん、あの聡い少年も自分と同じように結論へと辿り着いているはずだ。

その少年がこの情報をどうするのか、少し見物みものでもある。

だがとりあえず、フレイルがすべきことは任された陣営をできるだけ目減りさせることなく手際よく使い、この場所を守りきることだ。見れば、敵の陣は自分が読んでいた場所まで前進してきてくれている。後、数瞬で仕掛けてある第一の罠が発動する。

彼は横にいたビクターに視線を向けた。彼も心得たように頷くと伝令のために用意していた無地の高々と上げた。

それと同時に村の駐留軍は足並みを揃えて退却の形を取る。もちろん、仕掛けられている罠を踏まないように、そしてそれが存在していることを判らせないように巧みにこちらへと戻ってくる。

急に引き始めたフレイル達に傭兵達は気色ばんで一気に攻めへと転じた。

その動きを確認しながら罠の端に隠れていた兵士たちが綱を切る。

それと同時に丸太を組んだ足場がうんと跳ね上がった。

## 第十五話：一時の休戦（後書き）

まだ戦始まったばかりなのにソルデイス、休戦に持ち込んでいます。別に戦うのが好きではないのでこつこつ交渉はお手の物です。

逆にフレイルたちにいる軍のほうがりっかり戦っています。

と、言うかソルデイス、大将が最前線出るなよというのは作者の感想です。

## 第十六話：敵將の捕獲

もんどりうつて転がってゆく兵を横目で見ながら、フレイルは弓兵へ合図を送る。

と、同時に罠に掛かった敵兵に向かい無数の矢が射られた。

所々で断末魔の悲鳴が上がっているが、その殆どはトラント卿の正規軍のように見える。一方で傭兵と思しき人物たちは羽板の罠が発動すると同時に各々の判断で後方へと引いており、それほどの被害は受けていない。

「さつすが、場数を踏んでるだけはあるか」

フレイルは小さくぼやいて見せると二つ目の合図を送った。それと同時にマキシムが率いた軍が傭兵たちの群れの横っ腹に突っ込んでゆく。

思いも寄らぬ強襲に傭兵達は慌てて剣を構えようとしたものの、2方向から仕掛けられる攻撃に不利を悟ったのか大きく舌打をした後、踵を返して逃亡を開始した。

マキシムたちはその一団にある程度警戒しつつも深追いはせずに取りあえずはフレイルが率いている仲間の下へと合流した。

「さて、あんた達を守る傭兵も消えてくれたことだし、チェックメイトとしたいけど。投降する気ある？」

兵の中でも一番高価な鎧を着けている身分と気位が高そうな人物にフレイルはにつこりと問い掛けて見せた。

「ふざけた事を抜かすなっ！」

白い髭を生やした少し痩せぎすの将が唾を飛ばしながら反論しようとしたが、その横で構えていた脂ぎった感じの否めない将校が慌ててそれを止めた。

「ジャグレイ！黙っておれっ！」

その声に老人は不満そうに男を見た。しかし軍の中では彼の方が上位なのだろう、渋々ながらに口をつぐんだ。

「ワシはトラント卿の部下でダツチェンボルト侯爵じゃ。こっちはジヤグレイ男爵。正統な手続きで捕虜となるう」

何処か尊大でだが、瞳に謙へりくだった色の見えるダツチェンボルトにフレイルは少し鼻白んでみせたが、正式に申し出てきた者に下手な対応はできないためにとりあえず二人に向かい鷹揚とした雰囲気で頷いて見せた。

「それじゃ、武装を解除してもらえるかな。下手な動きをすれば控えている弓兵が矢を射掛けるから覚悟してくれ」

フレイルの声に二人を含めた兵たちが自らの手にしていた武器を地面に落とした。フレイルは全ての手から武器が離れたのを確認すると控えていたビクターに武装放棄の確認をさせる。

「あ、終わってる」

投降してきた兵士たちの見聞をしていると気の抜けるような口調の少年の声が響いた。

「副隊長！」

マキシムの言葉に兵たちが驚いて声の方へと視線を向けた。

そこにいたのは幼い感がまだ残る黒髪の少年だった。その後ろにはトラント卿と取引をしていた傭兵の姿も見える。

「誰ですか、それ」

二人の将兵の検分をしていたビクターがソルデイスの後ろに立つ見知らぬ男の姿にぼかぁんと口をあけて訊ねた。

ソルデイスはそんな彼の問いに小さく肩を竦めて見せた。

「敵の傭兵。向こうで得ていた情報がおかしいって事で暫く休戦している」と話そうって事になったから、連れてきた」

それから彼は慣れた足取りでビクターの傍に近づくと捕らえられたばかりの二人の顔をじっくりとみた。

白い髭の老将はそんな少年の顔を忌々しそうに見つめている。少しつついたら噛付いてきそうだ。彼は実用的な鎧を身に纏い、明らかに戦うことや義に忠実な人間に見えた。

そしてもう一人は明らかに戦闘向きではないでっぷりとした脂ぎっ

た身体に豪華絢爛な鎧を纏っており、近づいてきた少年をまるで物色するかのように見ていた。

「本当に稚児が兵を率いてるとはなあ」

ぼそりと呟いたダッチェンボルトの言葉にビクターを含めた回りがかつとなり少し兵の集中が途切れた。それを見越していたのかダッチェンボルトは腕にしこんでいた刃を取り出すと不用意に近づいてきた少年の首元にそれを当てた。

「気を抜いていたのが敗北だなっ！形勢逆転だっ！貴様らの上官は人質になった、道を開けてワシを元の部隊へ戻すんだなっ！」

大声で喚く男にソルデイスは呆れるように小さく息を吐いてみせた。

第十六話：敵将の捕獲（後書き）

サブタイトル、まんまです。

他にタイトルのつけようがなくて……ひねりぐらい加えたかったです。

## 第十七話：虜囚への詰問

「こういうのが状況を読めてないって言うんだろうな」

意気揚揚と喚きつづけるダツチエンボルトの態度に、ソルデイスは溜息と共にソウ呟くと表情一つ動かさずに自らの刀を即座に抜き放ち、目の前の巨体を薙ぎ払った。

一瞬、何が起きたのか理解できなかった侯爵だったが、自分の身体を襲う痛みに悶えるように地面へと転がりのた打ち回り始めた。

「これが本当のチエックメイト。」

ビクター、こういう風に隠し刃を持っている場合があるから、兵は鎧も脱がした状態で拘束しておかなきゃだめだよ」

わざと命を取らない程度に切つてのけた少年にジャグレイは驚きと諦めの表情を浮かべた。

これは情報とは違い飾り物の対象ではない。それを見誤っていた時点でこちらの敗北である。

視線が大人しくなったジャグレイに、ソルデイスは少しだけ目を眇めてみせた。

「武装を解いたら、自分の軍に戻ってください。人質と情報源は一人で十分ですから」

少年の言葉にジャグレイは顔を顰めてみせた。  
こういうのは戦の定石に反する行為だ。

未だ戦が続いている状態で兵を解放すれば、せっかく削った戦力がまた復活するからだ。

少年の若さからくる判断ミスかと思っただが、目の前の利発そうな少年はそれすらも弁えているように見えた。

「我々を解放するのか？また新たな武器を持ってここを襲うぞ」とりあえず宣言したジャグレイに彼はゆっくりと頷いてみせた。

「その時には、もう一度剣を交えるまでです。でも、その前にオージエニツク将軍とランズール卿が到着しますよ」

ジャグレイには少年の透き通るような水色の視線の先に今にも迫ってくるオージエニツク軍の足音が聞こえるようだった。

老将は少しの逡巡の後、深く溜息をつくとき先程まで自分が持っていた剣を指差して見せた。

「この剣は大事に保管しておいてくれ。古、<sup>こ</sup>国王陛下を守り通した先祖が拝領したものでわが家の家宝だからな」

潔いジャグレイの態度にソルデイスは深く頷くと彼から鞘を受け取り、<sup>うやうや</sup>恭しい仕草でその剣を納めたのだった。

兵の処理はビクターたちに任せて、ソルデイスはマキシムとフレイル、それから傭兵のトップと思しき人物をつれて近くの小屋へと入った。傭兵の肩には取りあえずの手当てをして貰ったダツチエンボルトが担がれている。

「その辺りに、『それ』下ろしてくれる？」

ソルデイスの言葉に、傭兵は頷き多少乱暴にダツチエンボルトを肩から下ろした。

「何をするつもりだっ！ 貴人を人質に取った時の対応は田舎物でも心得ておろうっ！」

自分の貴族としての立場を鑑みて対応しろと文句をいう男にソルデイスは人差し指で耳を塞ぐような仕草を試みさせた。

「うるさいなあ、あんたの場合、奇人のほうだろ」

「稚児が偉そうに！」

どこか嘲るような少年の口調に、ダツチエンボルトは唾棄するよう  
に言い捨てる。

その罵声にソルデイスは秀麗な眉間に皺を寄せる。

「誰が、稚児だ、誰が」

最近、どうもこの誤解が敵側に浸透している。どう考えても稚児が出来るほど整った顔をしているとは思っていないソルデイスはどう

してそんな風に誤解を受けるのか皆目見当つかなかつた。

「ま、顔と年齢でそう見えるっただけだ。気にしてたら疲れるぞ」  
たぶん、自分の顔の綺麗さに気付いていないのだろうなあ……とい  
う意味を含んだフレイルの言葉に、扉の傍で控えていたマキシムも  
小さくうなずいて見せた。

(……………二人とも、戦これが終わつたら少しじっくりと話し合つてもら  
うよ)

これ以上この話題を続けるのも面白くないソルデイスは、そこで一  
旦話題を打ち切り縄で拘束されているダツチエンボルトに向き直つ  
た。

「さてと、ダツチエンボルト卿？少しお話をしましょうか」

床に転がったままの自分を見下ろしてくる少年の瞳に、ダツチエン  
ボルトは少なからず驚異を覚えた。

確かに見目麗しい子供では有るが、その瞳はどこか無表情で冷徹さ  
を秘めている。少なからず、人の命をその手で奪うことに慣れてい  
る目だ。黒髪の奥に鎮座している透き通るような水色の瞳は、何か  
全てを見通しているようにも感じた。

「2年前の王都に始まり、パーグレット、ヴォナハン、サーヴェル  
グレイス、マウニー……」。

トラント卿の軍は数多くの傭兵を抱えているにも関わらず、蓄財  
が目減りするどころか必要以上に増えているように感じのですが、  
どうしてですか」

ソルデイスは都市の名前を呼び上げるたびに彼の前に指を立ててみ  
せた。

ダツチエンボルトは最初に上げられた2つの都市までは平静を保つ  
ていたダツチエンボルトだったが残りの3つの都市の名前を聞いた  
瞬間表情の奥に戦慄が走った。

## 第十七話：虜囚への詰問（後書き）

ソルデイス、鬼畜で策略家の一面を発揮です。

実は傭兵の名前、いまだに決めてません。ダッチエンボルトみたいな長い名前はやめます。ええ、絶対に。打つだけで指が疲れるもん。この名前。

とりあえず、ちょっと書き留めていた話4話（もう一つのシリーズも加えると5話）一気にupしてみました。うにゃあ、疲れたという感じです。

## 第十八話：略奪の痕跡

(なぜ、この小僧がそれを知っているっ！)

その3つの都市はトラント卿の中でも卿に近い人間だけで襲った土地の名前だった。略奪に近い強襲だったため、ジャグレイのような昔ながらの騎士はつれて行かず、更には大々的に自らの騎士団を使用することができないために、大量の傭兵を雇い入れた。

そして攻略すると同時に雇っていた傭兵たちの食事と飲み水に毒を盛り、すべてを殺害した。これでその土地を襲った事実も、傭兵たちに対価を支払わずに更に彼らが持っていた金品まで奪った事すら闇に消えたはずだった。

ダッチエンボルトはソルデイスの後ろにいた傭兵の顔を盗み見た。

その顔には驚愕と自分たちに対する大きな憤りを宿している。

「何を言っているのか……」

「動揺が顔に出てるよ。その上、今回も傭兵達に毒を盛る計画してただろ？」

今度は畳み掛けるようにフレイルが言葉を重ねた。

「そんなはず、あるわけないだろうっ！わが軍を誣告するのもいい加減にしてもらいたいものだな」

唸る様なダッチエンボルトの言葉にマキシムと傭兵は詰問をするソルデイス・フレイルの両名と虜囚となっている貴族を見比べた。

たしかに目の前の男は先ほど少しうろたえたが、それ以外に明確な証拠はない。たとえここで供述をしたところで「脅されて仕方なく嘘をついた」と言われたらそれまでだ。

「あくまでも、襲っていないと？」

彼の目前に鼻梁を寄せ、ゆっくりとした口調で問いかけたソルデイスに彼はぎろりと睨みを利かせる。

「当たり前だっ！王都は別として他の土地には言ったこともないぞ」

「ふうん……」

唾をも飛ばす勢いで否定にソルデイスは少し口角を上げ、彼から離れて後ろの3人に振り返った。それから小さく首を傾けて、ねだるように彼らにお願いする。

「3人とも、今の言葉の承認になってね？」

「……はい？」

はたまた珍しい少年の仕草に数年来の付き合いであるマキシムを初め、残り二人も呆けた返事をした。

そんな彼らを差し置いて、ソルデイスはダッチエンボルトの服を破ると彼が隠し持っていた皮製の袋をその懐から取り出した。

「こらっ！何をするっ！」

あわてたダッチエンボルトを差し置いてソルデイスはその袋の口をあけ、その中身を地面に広げる。そこから出てきたのは人目で価値がありそうと分かる宝石つきの装飾品や金貨だった。

少年はその中から女性が身につけるような装飾のひとつを拾い上げ、ダッチエンボルトの眼前に突き出した。

「これは、なに？」

それは確かに一番最初に襲ったバーグレットで妙齢の女性の死骸から奪ったものだった。王家から下賜されたという刻印が入ったそれは、新興貴族であるダッチエンボルトが喉から手を出してでも欲しい『伝統』という物に見えてトランドト卿には内緒にして自分のものとしていた。

そういえば、サーヴェルグレイスの時に雇っていた傭兵にこの装飾品を偶然見られてしまったがすぐにいつもの通り毒薬で殺害したため大事に至らなかった。

それをこの目の前の少年が知っているとは思えない。ならば、これは我が家が王家より賜ったことにすればいい。そうあのジャグレイの剣と同様に……ダッチエンボルトはそこまで考えて目の前の少年に虚偽の申告をしようとした。

「これは当家が昔から所有する……」

「へえ……そう」

しかしダッチエンボルトの言葉は最後まで言わせてもらえなかった。少年はそのままそれを持って立ち上がると、眼を見開いてこちらを見ている傭兵へとその装飾品を差し出した。

「はい、これ貴方の物でしょう」

傭兵はそれを両手で受け取ると確かめるようにその表面を撫でた。

「あなたの弟が傭兵に身をやつしてまで手に入れたあなたの奥さんの遺品。返しますね」

少年の発した言葉を聴き、その場にいた3人は驚愕の表情を浮かべた。傭兵は指先でその装飾を撫でながら、息を呑んだ。

確かにこれは自分の妻が実家から嫁いでくるときに持ってきたものだ。由緒ある家の令嬢だったが新興貴族だった自分と恋に落ち、両親を説得して嫁してくれた。

そのときに彼女の両親が持たせてくれたのがこの装飾品だった。

あの『狂王』の異名を持つバルガス王の下でも自分たちはそれなりに幸せに生きていた。

数年前、内乱が起きた時は自分たちまでその戦禍が飛び火するかと思われたが、内乱の火種は王都のみで炎上したので田舎に住む自分たちはそれほど被害を被らなかつた。すでに両親はいなかつたものの、彼女と弟との3人で慎ましく暮らしていた。

忘れもしないあの日、妻は実家のあるバークレッドに向かいそこで命を落とした。見つけた彼女の身体には乱暴された後があり、その上、彼女がいつも見につけていた装飾品も奪われていた。

それが、今、目の前にある。

ダッチエンボルトの懐から取り出されたそれが、少年の言葉の正しさを示している。

重い沈黙が小屋の中を暫し覆った。

## 第十八話：略奪の痕跡（後書き）

なんか、だんだん話が今の戦いからずれてきました。でもソルディス案外本領発揮しているかも。

この辺りの話は打っている最中に急に思いついたので字の配分が…  
…めちやくちや多い。多すぎだけど変に分けると更に訳がわからないことになるので、長いままupです。

## 第十九話：異能者の悲哀

その沈黙を破ったのは村の警備隊を率いている少年だった。

「傭兵さん、いやグルブナット卿って言ったほうがいいのかな？」

少年の言葉に彼は自分の半生を省みた。

確かに傭兵に身を賣<sup>やっ</sup>してからは名乗っていなかったが彼は父親からその爵位を引き継いでいた。その地位も誇りも棄ててまで自分は彼女と弟を探すほうを選択した。自分が治めていた土地のことは信頼できる家領<sup>かりよう</sup>に譲り、『傭兵となって仇を探す』と言って家をでた弟と同じように自分も傭兵となった。

剣の腕には自身があつたのでめきめきと傭兵としての名もあがり、弟からの手紙で名前が拳がっていたトランド卿の兵団に入ることが出来たのはつい先日だった。

「少年……お前が言ってるのは本当のことか？」  
凍りそうになる心を現したように声が低くなる。

だが、目の前に居る少年はそれにも物怖じせずうっと目を細めて見せた。

「時守の民から受けた『時主<sup>トキヌシ</sup>』の名前にかけて」

傭兵は……いやグルブナット卿はそれに深く頷くと、切り殺さんとする視線で画面蒼白になっているダッチエンボルトを見た。

冷酷な光に満ちた視線に晒されたダッチエンボルトはひいっと情けない声を立てながら身を竦ませる。

「でも、その人、ここで殺さないほうがいいと思うよ。あなたの仲間である傭兵達に証言させるいい材料じゃない？」

表情を動かさないまま、まさに虫の息の男を見下ろした少年の顔に、ダッチエンボルトは自分への恨みを露にしている傭兵よりも恐怖を覚えた。

「俺たちにはこの人、必要ないから連れて帰れば？」

傭兵に人質の所有権を譲渡するためにソルデイスがダッチエンボルト

トの肩に手を置こうとした瞬間、その虜囚は身を捻るようにその手から逃れた。

「化け物っ！」

ダッチエンボルトの叫び声に、憤慨したマキシムが抜刀しようとするのをソルデイスは視線で制すると、彼の手を怯えるように見ているダッチエンボルトの姿に小さく溜息を漏らした。

「とりあえず、後はあなたに任せます。マキシムはグルブナット卿に付いて行って、後の処理を頼む」

ソルデイスはそれだけ言い残すと誰からの視線からも逃れるように部屋を出た。

兵がそれぞれの持ち場に言っているために村の中は驚くほど人は少ない。彼はその中でも一番人目につかない路地に入ると、歩みを止めてじつと自分の手を見た。

「ここでも、『化け物』か」

自分の中に刻まれている呪いの言葉。それを自嘲するように自分に向けて呟くと静かに目を伏せる。

途端に無数に流れ込んでくる、過去の映像と決まった未来の道筋。

この戦は勝ち戦だ。あの傭兵に……グルブナットを見た瞬間に見えた過去と未来。勿論、引き渡したダッチエンボルトがどのような末路を迎えるかも、その時点でわかっている。

「確かに、『化け物』だ」

解かっていたことだ。解かっていることだ。

今、自分を慕ってくれている人たちだって、自分の異能の事や……それ以上の真実を知ればきっとあの虜囚と同じようにこの手を恐れるだろう。その未来を見たわけではないが、何となく自分の中で予測はできている。

「何で、『化け物』……なのかな」

こんな『定まった未来』だけを見る不必要な能力は欲しくなかった。こんな力さえ持っていなければ、父王は愚行に走らなかつたかもしれないし、自分のことをもう少し愛してくれたかも知れない。

「いや、それは、無理か……」

あの人が嫌っていたのは能力だけではなく髪の色もだった。そのことを思い出した所でソルデイスは静かに頭を振った。

今はこんなことをつらつらと考えている場合ではない。

ダッチエンボルトが捕まった事はジャグレイからトラント卿に伝わるだろうし、トラント卿の考えはグルブナットから傭兵部隊全体に伝わるだろう。そうなれば傭兵部隊はさっさとトラント卿の隊列から離脱する。それを見越してトラント卿が先に手を打つ可能性もあるが、後方で威張り腐ったままでいる卿の言葉よりも自分たちと一緒に戦っていたグルブナットの言葉のほうを傭兵達は信じることは目に見えている。

そして、何よりも自分の見る未来の映像の軍勢には傭兵が荷担していない。

ふと、新しい『未来』が彼の前に広がった。

「思ったよりも早いな」

見えた『未来』の中にオージェニック將軍とランズール卿の到着する姿が見えた。頭に浮かんだ映像から鑑みてもうすぐ傍まで来ているようだ。

「時は、いつでも俺の味方……か」

ソルデイスは寂しそうに一言呟くと、ぐっと表情を引締め恐らく総攻撃を仕掛けてくるだろうトラント軍の本隊を迎え撃つために、村正面へと走っていった。

## 第十九話：異能者の悲哀（後書き）

ソルデイスは『定まった時』しか見ることが出来ません。

つまり『過去の全て』と『確定した未来』だけです。また彼の発する『言葉』には独特の能力ちからがあるために余り嘘をつくこともできません。（嘘で喋った未来が変節して確定してしまうこともあるからです）

だから見えている『未来』と『過去』を照らし合わせていつも行動しています。

もうすぐ援軍が届けば、一旦、戦は終了です。そうすればもう少し話が早く進むかも、知れませんが。

## 第二十話：本陣との激突

村の前の陣営を指揮していたのはビージェットだった。

「副隊長！どうしてこちらに？」

ただでさえ大きいどんぐり眼を驚きで大きくしながら聴いてくる青年に、ソルデイスは事の次第をかいつまんで説明した。

この時、他の場所とは違い、村の正面側はまだ本格的な攻撃を受けていなかった。

だが、もう自分たちのすでに見える位置にトラント軍の本隊と見える騎馬隊は展開しており、何時、鬨とぎの声を上げて襲い掛かってきてもおかしくは無い状態ではある。

「そうなれば本格的な戦場はここだけだ。一番、剣が使える人間がここに来るのは当たり前だろ」

なんてことは無いという風体で最前線となるだろう場所に行こうとする少年の腕をビージェットは慌てて掴んだ。

「何で一番危ないところに行こうとするんすかっ！」

「さっきのと理由は同じ」

確かに、確かにこの目の前の少年が自分たちの部隊の中で一番強い。あのマキシムですら打ち負かされるほどの剣技を持っている。だからといって彼を最前線に出すのは許されざることだ。

「普通、部隊の一番偉い人は後ろにどおんと構えているもんじゃないですかっ！」

何故そんなにも必至で自分を止めるのか解からないと顔に出しながら、ソルデイスは自分よりかなり上にあるビージェットの顔を見上げた。

「この部隊で一番偉いのはランズール卿。それにそのランズール卿だって戦になると最前線に出られる」

ソルデイスはそれだけ言ってビージェットの腕を払うと、ずんずんと歩兵達が緊張して構えている場所へと向かう。

「だからって副隊長が真つ先に戦火の中に飛び込む理由になりませんって！」

どうしても最前線に向おうとするソルデイスをビージェットは早足で追いかけながら、もう一度ソルデイスの腕を掴もうとした。

しかしその前にソルデイスは自分の腰に携えている剣を引き抜くと中空に刃を閃かせた。

カインツ！

鋭い音と共に矢が落ちる。

「鬨とぎの声があがるぞっ！開戦だ」

ソルデイスの鋭い声に、その場の空気が一瞬にしてピンと張り詰めた。先程までソルデイスに文句をつけていたビージェットもすぐに自分の剣を抜き、盾の影に隠れる。

それと同時に大きな声が敵陣からあがり、無数の矢の雨が自分たちの陣へと注がれた。

「弓矢隊、準備、射てっ！」

ソルデイスの号令と共にこちらも矢を放つ。ソルデイスもその場に倒れている弓兵から弓を借りると敵から飛んできた矢を2、3本掴んで敵に射返した。

「あともう少しで矢の攻撃が止む、そしたら打ってでる」

ソルデイスの言葉どおりに敵からの大量の矢の雨はすぐに止んだ。

もちろん、その代わり、準備を終えた本隊が一斉に前に進軍を開始する。

その進軍する姿をソルデイスは確認すると傍に控えているビージェットに深く頷いて見せた。

ビージェットも頷き返すと陣の後方で巨大な器具を扱っている部下へと合図を送る。

パシュンツ！

張り詰めていた綱が切れ空を切る音と共に大量の瓦礫が宙を待って敵軍へと投擲される。

パシュンツパシュンツ！

飛んでくる無数の石に少し怯んだところに追い討ちを掛けるように2度、3度と瓦礫を発射する。それにより揃っていた軍列が乱れたところで、ソルデイスは剣を高々と掲げて見せた。

「行けっ！」

その号令と共に盾の陰に隠れていた兵が一斉に敵軍に向って突進を開始する。ソルデイスもその軍勢の中に入ると何とか敵に対応しようとしているトランド軍に切りかかって行った。

先陣の中で颯爽と剣を使っているソルデイスの姿にビージェットは泣きたい気分で溜息をついた。

ソルデイスの指揮のもと、軍を仕切る自分はこの場から離れられない。本当は連れ戻したいのは山々なのだが、迎えに行けば逆に少年の足手纏いになることは必至だ。

「どうしよ。これをマキシムさんに知れたら……」

「知られたら？」

自分の後ろから響いた声にビージェットはびきいんと背筋を伸ばすと恐る恐る後ろを振り返った。

## 第二十話：本陣との激突（後書き）

とうとう本陣との戦に入りました。長かったです。

これで章の序盤（！）がやっと終わりそうです。

ちなみにマキシムはとってもソルデイスに対して過保護です。可愛い妹に対するよりも過保護です。ゆえに副隊長を危険に晒した人物は妹に言い寄る人物よりもより厳しくイビリ倒されます。

## 第二十一話：三人の剣士

そこには壮絶な笑みを浮かべたマキシムと、『ありやりや』と呆れた顔をしたフレイルの姿があった。

「どうして、副隊長が最前線で戦っている？」

「あうう、おうう」

勝手に最前線に飛び出していったとはいえ、それを止めきれなかった自分に責任がないとはいえない。いつもなら、止められなかったことを庇ってくれる副隊長は今、戦闘真っ只中だ。

「たぶん、副隊長サンが勝手に出てったんだろ。ここで誰かに詰め寄っても仕方ない。とりあえず、前線に出て彼を保護するか……それが出来なくても加勢するぐらいしなきゃまずいだろ」

岩の投擲という奇襲で少しは陣形が崩れているものの多勢に無勢なのは否めない。

いくら少年の剣の腕前が素晴らしいものでも体力の限界だつてあるのだ。

「それでは、また後でいろいろと話そう。ビージェット」

マキシムは固まりきったビージェットにそう告げるとフレイルを伴って前線にて戦っているソルデイスの元へと急いだ。

ソルデイスは襲い来る兵に容赦なく切り刻んだ。剣を持つ左手はすでに敵の血を浴びて真っ赤に染まっている。いや、その全身も返り血でしとど濡れていた。

（さすがに、息があがってくるな）

剣の腕は確かではあるが、まだソルデイスも16歳の少年である。この村に移り住むようになってからは王宮にいたよりもはるかに食を取るようになってはいるが、まだ大人の体力に追いつけてはいない。

クラウス

（兄上はもう俺の年齢の時にはもつと体格がよかつたはずなのに）確かに遺伝的には似たような体力・体格を持っているはずなのだが、明らかに自分のほうが体力が少ない気がする。

（やっぱり成長期に食べられなかったのは拙ますいのかな）

性格にはあの王宮にいる間は殆どのものが食べられなかった。父による毒殺命令で全ての食事に毒が盛られていたからだ。最初のうちは毒の入っていない料理だけを選んで食べていたが、次第に満遍なく全ての料理に入れられるようになった。

そうなるかすべての料理が食べることは出来なくなり、調理場に行つては適当な食材を盗んでみたり、王宮の中で育てられている食べられる果実で自分は成長してきた。

（おかげで今でも同年代の人間よりも細いんだよな。腕が）一緒に旅してきたスターリングやこの村にいる同年代の人間とも比べてみたが、どうやら自分は発達不良な部分があるらしい。

そんなことをつらつらと考えながら、ソルデイスは舞うように剣を閃かせる。その旅に敵の歩兵の身体は面白いように崩折れていく。それを見ていた先行の騎兵が怯えるように奇声を上げつつ、ソルデイスへと槍を放った。

「副隊長っ！」

ビージェットは悲痛な声で少年に向かって叫んだ。

ガギイッ！

しかし放たれた槍は少年に大ぶりの剣で薙ぎ払われた。

「大丈夫ですか、副隊長」

槍を薙ぎ払ったのはやっとの思いで駆けつけたマキシムだった。フレイルも槍の切っ先からソルデイスを守るような位置へと入っている。

「マキシム、グッドタイミングだ。もうすぐ騎馬隊が導入される」ソルデイスは上がる息を何とか押さえながら、自分の補佐官に頷い

て見せた。

マキシムの手にはいつも彼が稽古用に持っている細身の剣とは違う馬をも尻ぎ殺せるほどの大ぶりの剣が握られている。先程、槍を払ったのもこの剣だ。

未だ体力の限られるソルデイスには持てない破壊力のみので剣は騎馬を相手にする時、その威力を発揮する。

ソルデイスの言葉にマキシムは深く頷いてみせた。次いで少年は臨時の参謀に目を向けると、少しだけ笑って見せた。

「ファード卿は下がっててください。客人である貴方あなたを最前線に立たせるのは忍びない」

ぎこちないその笑みにフレイルは肩を竦めて見せ、軽く拳骨で彼の頭を小突く。

「あのな、こういう最前線には剣の腕が立つ人間が必要だ。とか、言って後ろにいる部下黙らせて来たんだろ？その理論から行くと俺もこの位置に立つ権利があるはずだぜ」

フレイルの申し出は尤ももっともだとマキシムは思ったが、目の前の自分の上官はそれでも食い下がるように彼に反論しようとした。

「ま、そう言ってるうちに真打の騎馬隊のご登場だ。四の五の言わずに頼ってみるよ」

フレイルはそういうとスラリとした長剣を構えた。

たしかにもう馬の蹄の音が近い所で響いている。ソルデイスは大きく溜息をつくど、自分の剣をしっかりと左手に構えた。

## 第二十一話：三人の剣士（後書き）

こつも話が進まない回だとサブタイトルに困ります。

次話のサブタイトルが決定しているだけに特に。

とりあえず、ソルデイス・マキシム・フレイルのこの部隊の中でも剣の腕が立つ三人の戦いっぷりということで『三人の剣士』としました。

仮タイトルでは『』の剣豪』としていたのですが、ソルデイスは『豪』ではないので変更です。

## 第二十二話：指揮官の思惑

トラント卿の腹心・ブランジッド卿は先頭を切って戦うまだ幼さの残る少年とそれを守るように戦う青年二人を苦々しく見ていた。

またあの悪魔のような強さを持つ少年が自分たちの行く手を邪魔する。

先程本陣に戻ってきたトラント卿の配下としては異色の存在である老将ジャグレイは機知に長ける人物だと評価しているようだったが、それは得てして自分たちにとり厄介な人物であるといっているのと同じである。

（それにダツチエンボルト卿のこともある）

今回はやけに張り切ってジャグレイに引つ付いて奇襲組に参加していた奴が、『傭兵』と一緒に連れて行かれたと報告されている。

（あいつは知らなくてもいい情報を持っているからな）

口が堅い人物だとは思っているが、自分の命が関わればそれもどうなるかわからない。それを証拠に今現在、傭兵たちの動きが鈍くなり出している。

とくに右舷を任していた『グローブナー』とか名乗る傭兵師団長の部隊は完全に武力を放棄しているようにも見える。

「それもこれも、あの小僧が何かを吹き込んだからか」

唸るようなブランジッドの声に傍に控えていた側近が怯える。それを気にすることもなく、彼は目の前の戦場で戦い続ける少年を睨みつけた。

見目だけは麗しい少年だ。それだけの美貌をもっているのなら色小姓として控えていればいいものを、自分たちに仇するなど言語道断だ。

（この戦が終わったら、刻み殺してやる！いや、手足の腱を切つて、本当の色奴隷にしてやる）

下卑た考えを胸にブランジッドは側近が差し出していた槍をその手

に取った。

ソルデイスは妙な視線に悪寒を感じ、騎兵の中心へと視線を走らせた。

視線を向けてきたのは先頭の騎兵の中にいる壮年の将だ。

(……変な想像をしてんな)

頭に送られてくる彼の強烈な『思念』のヴィジョンはあまり口では言い表せられない、というか口にしたくもない下品な想像だった。もともと読もうと思えば簡単に他人の個心の奥の置くまで読み取れる彼にとり、一番面倒なのはあからさまに『心』を垂れ流す連中である。とくに怒りと共に考えをしているときはその妄想はかなり強烈に自分の心に届く。

(うざい……)

少年は流れ込んでくるヴィジョンを意志の力で何とかシャットアウトすると、ぐるりと辺りを見回した。

大分、人が死んでいる。自分たちが切り伏せたトラント卿側の人間は勿論のこと、自分が指揮している部隊の人間も大分、屍や重傷者として地面に伏せている者がでている。

(さっさと決着をつけないと、更に被害がでる)

ソルデイスはもう一度辺りを見回した。その視線の先に鞍をつけた馬が主もなく歩いている姿があった。たぶん先行の騎兵が乗ってきたものだろう。主はすでに野に臥しているのだろうか。

(ちょうどいい)

ソルデイスは近場の兵が持っていた槍を拾い上げると駆け足で馬に近づき、見事な跳躍でそれに跨った。驚いた馬が嘶きを上げて振り落とそうとするのを、手馴れた手綱さばきでいなすとまるで最初から自分の馬であったかのようにその馬を繰り始めた。

「副隊長っ！」

突然の動きに慌てたマキシムがその後を追おうとするが、もとより馬と人の足では速さが違う上に未だ自分たちに切りかかってくる歩兵と対峙しなくてはいけない。

盛大に舌打をしたマキシムにフレイルは諦めたように

「ビージェットに文句を言えなくなっちまったな」と嘆いてみせた。

歩兵だらけの戦場から馬を駆り駆け出してきた少年の姿に、騎士団は少し怯んだ。

先程から自分たちの部隊を相手に鬼神の如き強さを晒している少年だ。最初に聞いた話では単なるランズール卿の色小姓だと聞いていたのに、この強さは反則的である。

それでも向ってくるのはたった一騎であることに少しだけ余裕を感じていた騎兵団に向って、ソルデイスは持っていた槍を投げつけた。それは狙い済ましたように騎士団の中心にいるブランジッド卿を守るように配置されていた一人の兵の眉間へと突き刺さった。

少年が飛ばしたとは思えないほど鋭利に正確に、そして威力を持って飛んだ槍に騎士団の中に脅えが広がる。

その一瞬の隙を逃さずに、彼は騎馬のまま身体を落とし地面に突き刺さっている槍を拾い上げると空かさず二投目を放った。

## 第二十二話：指揮官の思惑（後書き）

しまった……昨日考えついたはずのこの話のサブタイトルを綺麗さっぱり忘れてしまいました。急遽で名前をつけたものの、こんなだったかなあと困惑しちゃうんです。

やっと次で戦が終わります。

戦が終われば、クラウス&シエリルの方に話に移ります。

## 第二十三話：戦の幕引き

投げつけた槍はまたもブランジツドの護衛の一人を馬上から落とした。

一人、また一人と自分の護衛から殺していく少年の淀みない攻撃にブランジツト卿は「ひいっ」と醜態を晒しながら悲鳴をあげた。

「な……何をやっておるっ！敵は小僧一人だ。どうやってもいいから叩き落せっ！」

あまりの恐怖に金切り声で命令を下したブランジツドの声で、ソルデイスの周りにいた騎士たちは慌てて剣を抜き放ち、槍を身構えた。「やっと、その気になった？」

歌うように、楽しそうに呟く少年の顔はこの世の理由も着かぬ恐怖を具現化しているようだ。

しかし自分たちにだって面目というものがある。たったひとりの少年の気迫に尻込みして負けるなど、後々の自分の評判のためには許されざることだった。

騎兵の一人はごくりと大きく唾を飲み込むと、馬の腹を蹴りソルデイスへと突進を開始した。

「だけど。もう遅いよ」

その騎士の士気を削ぐように目の前の少年は呟いた。

それと同時に撤退を知らせる法螺ホウの音が戦場に響き渡った。

「ランズール卿と……オージェニツク將軍まで到着したみたいだ。どうする？」

自分を取り囲む騎兵に臆する事無く、無表情のまま問い掛けてくる少年に騎士たちはぐっと動きを止めた。

こんな恐ろしいモノを見たことが無い。

騎士たちは助けを求めるように自分たちの指揮官であるブランジツドを視線で探した。だがその指揮官は法螺の音を幸いにと自分たちを置いて撤退を開始していた。

騎士たちは今度は互いに視線を交すと急いで剣を鞘へと収め、馬の向きを変えると一目散に逃走を開始した。

ソルデイスはその姿を暫く見送った後、大きく息を吐く。

（敵が単純でよかった。次の手がなかったから、危うかった）

自分が見る限り馬上から取れる位置には槍は落ちておらず、敵から武器を奪い取るうにも体力は限界に近かった。もし彼らが自分の命を顧みず、再度、ソルデイスに立ち向かってきたなら、今度は彼自身が遁走しなくてはならなかっただろう。

（そろそろ到着するって解かってたから発足も噛ませたけど）

いくら自分が死なない未来を知っていたとしても、自分が大怪我を負う可能性がないとはいえない。

もう一度大きく息を吐いたソルデイスはとりあえず村へ戻るために馬の向きを換えた。

「あ……」

そこに居たのは怒りを乗せた笑顔というとても恐ろしい表情のマキシムと、この後ソルデイスの身に起こるだろう事を考えて合掌をしているフレイルの姿だった。

「本当にどういふおつもりだったんですか？」

マキシムは背中に暗雲を背負いながらゆうっくりと少年に近づいてきた。

「はったりと同時に撤退の法螺がなったからいいようなものの、孤立無援のあの状態で勝ち抜くおつもりだったんですか」

明らかな怒気に何とか言い訳を考えてみるが、どうもいい文句が浮かばない。ソルデイスはそれでも何とか勇気を振り絞って自分の補佐官の傍まで馬を進めた。

「えっと、一応、もうそろそろ將軍とか、卿とか来る頃合かなと思っただんだ」

「でも予想半分で、自分でも少しヤバイって思ってたよな」

マキシムの横で佇んでいたフレイルも内心少し怒っていたようで、ソルデイスの言葉に有難くないフォローを入れてくれる。

凶星を指した台詞に、ソルデイスは常に無いぐらいに困った顔をした。そんなこと無いよ、と惚け様かとも思ったが、2対の瞳はそれを許してくれそうにはなかった。

ソルデイスはとりあえず馬から下りると、自分より高い位置にある副官の顔を見上げた。

「心配掛けて、ごめん」

殊勝に謝る少年の姿にマキシムはその小さな身体をしっかりと抱きしめ「解かって下さればいいです」と彼の耳元で呟いた。

「あなたにも、心配かけましたか？」

ソルデイスの問いにフレイルは少し目を眇めて、未だマキシムに抱きしめられたままで居る彼の頭をぼんぼんと軽く叩いて見せた。

## 第二十三話：戦の幕引き（後書き）

やっと戦が終わりました。

長かったです。戦の描写は苦手なので、書くのも億劫というか遅筆になるといっつか。やっぱり平和が一番です。

と、いつでも大元の内乱は膠着状態「じょうちやくじょうたい」といのままなので、戦の幕引きって言うのもおかしいのかも知れません。

## 第二十四話：訪れた援軍

ソルデイスの無事を確かめるマキシムの抱擁が一通り終わったところで、ソルデイスはマキシムとフレイルを伴って村と外界とを繋ぐ街道へと向った。

戦によって出来た屍は敵・味方関係なく残った村人たちが葬っている。よく見るとトラント卿の部隊から離脱したグルブナット卿の率いる傭兵隊も埋葬に手を貸している。伝令が行き渡っているからだろうか、村人たちは自分たちの村の警備隊ではない人間の存在を出来るだけ気にしないようにしていた。

もとより、オージェニツク將軍の軍隊が来るまでの短期間の略奪のつもりだったのかトラント卿の引き際は見事で、すでに村近くの街道からも見えない位置にまで撤退をしている。本来ならば敵襲を受けてから助けを呼ぶため、略奪を受け始めてから後4〜5日の猶予はあると思っていたらうに、とソルデイスはゆっくりと思考を巡らせた。

もし、それだけの時間があったとしたら、確かに村は一溜りたたまもなかっただろう。やはり騎士としての訓練を受けているものと急場でソルデイスに鍛えられた村人ではそのスキルの差は必至だ。

せめて自分たち程度ではないにせよもう少し、戦略と戦術のセンスに恵まれた騎士が欲しいと思ってしまう。

ふと、思考の淵から上ってきたソルデイスの耳に駆けてくる馬の蹄の音が届いた。

余程急いでいるのだろう。いつもなら揃っているその音は、ばらばらではあるが軽快なりズムを刻んで近づいてきている。

「あ、本当に到着した」

ようやくと視界に砂煙を上げ近づいてくる軍の姿にソルデイスは歩くのをやめた。

「本当につて……」

「副隊長……」

何の気なしに発せられたソルデイスの本心の呟きに、フレイルとマキシムは呆れながら肩を落とした。

オージエニツク將軍と副官のランズールは村に続く道をただ只管ひたすらに駆けていた。

途中、村へと続く街道とトラント卿の領土へと続く道への分岐点のところで見慣れぬ軍勢を見かけた。たぶんあれが村を攻めていたトラント卿の兵なのだろう。とりあえず、余り深追いしないように言いくるめ、残兵を蹴散らすために少数の部隊で追撃させた。

だが、本隊はそのまま村への進路をとった。指揮官二人に取り、まず心配すべきは先にランズール卿の領地である村とそれを守る年若い副官の無事だったからだ。

「ランズール、あれを見るっ！」

村へと続く街道の一角に青年二人を従えた黒髪の少年の姿があった。將軍たちの部隊を見つけ大きく手を振ってみせる少年とは対照的に、青年たちは何か疲れたように肩を落としていた。

「ソリユード・アドラム！無事だったか」

ランズール卿の発する言葉が届いたのか少年は村のほうを一度指差して、大きく腕でマルを作ってみせた。どうやら彼は村の無事を問われたと思っっているようだ。

そんな少年たちの傍でオージエニツク將軍らは馬の脚を止めた。

「素早く援軍を下さったお陰でかろうじて勝利することができました」

深々と頭を下げる少年の姿に二人は目を眇すがめ、ゆっくりとした仕草で馬から下りた。

目の前の少年は相変わらず小さな身体をしていた。華奢にみえる体つきは未だ彼を実年齢よりも幼く見せている。この細い腕で騎士を

も風ぎ殺す技を繰り出すことなど実際見ていなければ誰も信じないだろう。

「よくぞ、村を守った」

ランズールの言葉に、ソルデイスは視線を村へと戻すと、「みんなが頑張りました」と告げた。それから少し視線を落とし、悔しそうに呟く。

「でも、俺の采配ミスのおかげで5名ほど死人が……それに負傷者も沢山出ています」

いつも死人を出さないように心がけている少年は、こういう報告をする時誰よりもつらそうな表情をする。

戦なのだ、ある程度の死者は仕方無いことと優しい少年には思えないのかもしれない。

「5名で采配ミスなら殆どの将軍が無能だな」

ソルデイスの言葉にオージェニツクは溜息まじりに呟いた。

自分の言葉に将軍が気分を害したのだろうかと考えたソルデイスは慌てて言葉を募ろうとした。

「それは、戦が大きいから……今回みたいな村の小競り合いとは規模が」

その言葉をオージェニツクは大きく首を振ることで制すると、まだ自分の眼下にある彼の頭を撫でた。

「いいかい、ソリユード・アドラム。今回の君の相手は正規の軍勢だ。それを相手にまだ戦になれていない村人を使い、僅か5名の死者で済ませたのだ。それは誇れることだと思いなさい。卑下することとは君の補佐をしているマキシムの評価も下げる可能性がある」

「あ、はい……すみません」

言い諭された言葉にソルデイスは大きく頭を下げた。まだ自分はこういう人との付き合いの仕方が下手だと思う。

ただ自分の頭を撫でてくれる手から伝わってくる優しい感情は、ソルデイスに対する怒りなどは微塵も無くてそれがくすぐったかった。「誉められた場合は、単純にお礼の言葉だけでよい」

簡潔に纏められた言葉にソルデイスは穏やかな表情を浮かべ、

「はい……えっと、ありがとうございます」

と心の底からの感謝の意を言葉にしたのだった。

## 第二十四話：訪れた援軍（後書き）

やっと將軍たちの軍が到着しました。長かったです。本当に長かったです。

これでやっとこの村での話から一旦離れます。

## 第二十五話：変化の兆し

オージエニツクとの会話が一旦終わったところで、今度はランズールが彼の傍に来て小さな少年の体を抱きしめた。

「怪我とかはしとらんようだな」

「はい」

こういう直接的な親愛に慣れていないのか、この黒髪の少年はランズールに対するとき戸惑いの観を隠し切れない。それが微笑ましいので、マキシムもオージエニツクもこの老人の対応を止めようとはしない。

「おい、あれ、いいのか？」

唯一、この状況を始めてみるフレイルだけが隣にいるマキシムに問い掛けたが、彼が目線だけで「大丈夫だ」と返すと「そういうものなのか」と納得してみせた。

「それにしても、まだまだ細い。ちゃんと食べておるか？」

「大丈夫です。俺が食べたくないって言うても、マキシムたちが無理矢理に食わせてくれます」

この老人はソルデイスに会うたびに食事を取っているのかを聞いてくるのが日課になっているようだ。ソルデイス自身もランズール達に初めて会った時の自分がどれほど栄養不足であったかわかっている。だが王宮で毒が入っていない物だけを選んで食べ、少食を通していた所為もあり、彼自身思うほど大食になれないのだ。

（そつえば、あいつも会う度に食事が足りんぞつて怒っていたな）  
銀色の髪の幼馴染みの顔を思い浮かべて、小さく苦笑した。

「おや、ソリユートが笑うとは珍しい」

少しだけ口元が笑ったソルデイスにランズールは嬉しそくに目を眇すがめた。

「え？」

ソルデイスはその言葉に驚いたように目を見開いた。

ソルデイス自身にとって、『笑顔』とは意図的に作るものであつて事前と毀れるものではない。少なくともあの城にいる時に『人目』のある場所で自然な表情でいることなど絶対になかった。

自分は少しづつ変わってきているのだろうか。感情を持たない『化け物』から『人』へと変化しているのだろうか。

「俺は、笑えてますか？」

少年が出すに<sup>おかし</sup>しては不可解な問いにランズールは優しい目で笑つて見せた。

この少年の過去にどれほどのことがあつたのかは知らないが、彼は自分が感情を持たない『人』とは違う何か』であるように認識している節がある。

確かにこの子供の剣の技量や軍を率いるときの策略などは普通の人と比べてもずば抜けて優れているのは認める。しかし、彼が感情を持たない『人形』でないことはランズールにも彼の上役であるオージェニツク將軍も、何よりこの村にいる誰もが知っていた。

彼は小さいその腕『かいな』で誰よりも優しく回りにいる者たちを必死に守ろうとしている。感情を表に出さないのだから、きつとそれによつて何かを守ろうとしていた痕跡なのだろうと推察できる。

「優しい笑顔だった。きちんと胸を晴れるような、な」

ランズールはそう告げると少々乱暴にまだまだ自分よりも背の低い少年の頭を乱暴になでて見せた。

フレイルはランズール協にもみくちやにされているソルデイスを横目で見ながら、オージェニツクの前にたつた。

（噂に違<sup>たが</sup>わず立派な御仁だ）

先ほどのソルデイスに対しても単純に嗜めるでもなく一本筋の通つた対応を試みせた。さすが智将として誉れ高き人物といえる。

「お初にお目にかかります。流れで軍師をしているフレイル・ファードです」

従軍経験のある一般男性が身に着けている儀礼法でフレイルが挨拶をしてみせると、彼は少しだけ視線を鋭くして見せた。

「流れで軍師とは、な。確かに色々《・・》と『知識』があるようだ」

探りを入れるようなオージエニツクの言葉に、彼も深い笑みで答えをみせる。

こういう腹の探りあいには嫌いではない。寧ろ、その対象にされている事が楽しくも感じる。

「まあ、確かに色々。故にこれ以上『流れ』で軍師をやるには難しくなってきたので、仕官先でも探そうかとの村に来たんです」  
こちらも含みを持たせて返せば、オージエニツクは面白そうに目を細めてみせた。

「ベネシエンドやブロージェカではなく、こんな辺境の村に、かね？」

確信を突く問いにフレイルは道化おどけるように小さく肩を竦めて見せた。

「いきなりそんな大きな都市に行っても指揮系統に喰い込めませんからね。ここなら、ランズール卿直営地でもあるし、何よりも南方を二人の信任の厚いソリユード・アドラムがいます。」

俺の望む仕官の形への一番の近道だと確信したんですよ」

あくまで二人に仕官するための足がかりとして現れたという『フレイル・ファード』という人物をじっくりと見極めながら、オージエニツクは鷹揚に頷いて見せた。

## 第二十五話：変化の兆し（後書き）

久しぶりにソルデイスが笑いました。

笑わない主人公ってこれほどまでに書きにくいのかと改めて実感しながら書いていたら、とうとう笑うことに成功しました。

これからリハビリしてどんどん主人公を笑わせないと……たぶん、無理でしょうけど。

## 第二十六話：軍師の行き先

「確かに貴殿の言うとおりかもしれぬ」

その言葉にフレイルは小さく口元を緩ませた。

「しかし、ここでは場所が悪かるう。この村にも、ベネシエンドにもすでに信頼に足る軍師がいる。二つの指揮系統が軍の混乱を招くのは定石だ。」

貴殿は他の軍師の下での『作戦を作るだけの指揮』になど興味はないと見えるが？」

続けられたオージェニツクの言葉にフレイルは返す言葉が見つからなかった。

指摘された通りだった。最終決定を下す軍師の数が複数になれば軍の統率は乱れる。

フレイルの当初の目的は『王子』<sup>フェーリオン</sup>の軍師となることだったが、彼が自分と同等、いや、それ以上の才能に恵まれている以上、ここで軍師になることは難しいだろう。

ならばとソリユードの上司に召抱えられることも考えていたのだが、智将として名高いオージェニツク卿自身がすでに軍師であるためそれも無理だ。

彼にとつてこれは想定外の事態ではあった。

「それならば、ブロージェカにいるガイフィード將軍の元に紹介してみてはどうですか？あそこにはまだ正式な軍師がいないと聞いています」

横から助け舟を出してきたのは、ランズール卿のスキンシップから逃れることに成功したソルデイスだった。彼は吃驚している二人の視線に臆する事無く近づいてきた。

「まだ会ったばかりですが、彼の人柄に問題はないように見受けられます。ここで雇えないからといって彼のような才能を野に出し、敵側に持っていかれるのは怖い。それならば……」

ソリユードの言葉に、壮年の將軍は「ふむ」と考え込んだ。

目の前の少年にしては珍しい申し出だ。いつも少し控え目に隠れている雰囲気があったのだが、その彼が自らここまで意見を言うのは本当に稀有なことだった。

「確かにソリユードのいう事も一理ある。取り合えずガイフィールド殿に連絡をとり、承諾を得てみてから考えましょう」

オージエニツクは即決すると、すぐに自分の部下に申し付け荷駄の中から通信用の鳩を持ってこさせた。更に概要を纏めた小さな手紙を手早く書きとめると、鳩の足に括りつけ空へと放す。

放たれた鳩は何故か、数度、ソルデイスの頭上を旋回してから、大空へと飛び立っていった。

「返事は然程遅くないうちに帰ってくるだろう。その間、貴殿はどうしたい？」

伝書鳩の不思議な行動に目を見張っていたフレイルの方へ振り返ったオージエニツクは何事もなかったように問い掛けてきた。その顔はフレイルとは違い一辺の驚きも見せていなかった。

(……って、ことはこれも彼の周りでは『普通』の光景ってことか) 今更ながらソルデイスの異質さを確認しながら、フレイルは將軍の問い掛けに迷いなく答えた。

「俺はここで待機したいですね。結果が出るまでは何処にいたってやることもないでしょうし、それならこういう温泉街でゆっくりしてたいってのが本音です」

フレイルは一旦、そこで切ると苦笑しながら、「それに」と短く続けた。

「それに？」

オージエニツクが言葉の先を求めると、フレイルは自分の横にいるソルデイスの頭をがしがしと撫でた。

「ここにはこいつみたいに面白い少年もいますからね、何処にいるより厭きないでしょ」

フレイルの言葉にオージエニツクは朗らかに笑いながら、

「それは確かに」  
と応えた。

どうやらこの『軍師』を名乗る青年は『自分たちが気に入っている少年』に悪感情を抱いていないようだ。

それに安堵しながら笑っているとソルデイスが少し不満げに二人を見ている。

「俺、そんなに不思議ちゃんですか？」

珍しく年相応の対応をした少年に、周りにいた全員が小さく噴出したのだった。

## 第二十六話・軍師の行き先（後書き）

やっとこの更新です。すごく産むのに苦労しました。投稿前にも、頭から直しを加えるほど、ブレーキのかかる部分でした。

これで次話から物語の舞台がソルデイスのいる田舎村からクラウドたちのいるブロージエカへと移動します。

## 第二十七話：王女の憂鬱

北方の要塞都市・ブロージエカ。

その都市の中、王女・シエリルファーナは今日も不満そうに空を見上げていた。

この都市に来てからもうすでに3年の時が経とうとしている。それは一番年の近い末兄と、長兄の二人と別れてからの期間となる。

長兄は敵に囚われてからの情報が殆ど無い。昔馴染みの魔術師ルアンリルからの話ではきちんと敵の手から逃亡したと聞いているが、それならば何故、自分達の元に帰って来てくれないのだろうか。その問いを投げかけようとすると、ルアンリルも一緒に逃亡してきた竜族の青年・ケイシユンも曖昧な反応だけで答えてくれない。

その様子に腹を立て次兄に文句を言ってみても、彼は「答えないってことはそれなりの理由があるからだろう」と結論付けて、自分に加勢してくれようとはしなかった。

「なんで、なんでよ」

ぎゅうつと拳を握り締めても、答えなど出ない。やけに苦しくなつて、涙が出そうになるだけだ。

「私に、力がないから、話しても貰えないのかな」

守られているだけでは、自分の与えられた情況に文句を言う資格などないと悟らされた3年前のあの日から努力し続けているのに兄たちの足元にも及ばない。自分は無力な十二歳の少女でしかない。

出自が高い身分の息女だと知れているせいか、周りの大人たちも自分を丁寧<sup>ていねい</sup>に扱う。武道を習いたいと訴えても、聞き入れてくれる人など少ない。

「待たせた？」

不意に呼びかけられた少年の声にシエリルは嬉しそうに振り返った。立っていたのは、自分の願いに快諾してくれた次兄の部下であり、末兄の信頼厚い少年・スターリングだった。

「大丈夫。さ、剣の修行をお願いします」

茶色の長い髪を後ろでひとつに縛り上げた彼女は末兄と同年の彼に一礼をしてから、剣を構えた。スターリングも軽く一礼をすると自分の腰に逃えている剣を抜く。

「たあっ！」

最初のころよりも幾分かマシになった踏み込みで鋭く切り込むと、スターリングは剣先でそれを流す。

「第一激の後、横への注意を怠ってる」

自らの横をすり抜けるシエリルの体をぽんつと押せば、少女は自らの勢いとあいまってすぐに転んでしまう。しかし彼女も慣れて来たのか、そのまま受身を取りすぐに立ち上がるとまたすぐに剣を横に閃かせる。

「受身からの攻撃はうまくなってる。ただ腕が伸びてないから、距離が稼げない」

それすらも読まれているように払われて、シエリルは唇を噛んだ。未だ自分はこの師匠に本気を出させることができていない。それが口惜しくて仕方ない。

意気が上がりそうになりながらも必死で剣を振るう少女に、スターリングは少しだけ眉をしかめた。

（やはり剣だと体力の無さが浮き彫りになるな）

少女の太刀筋はそれほど悪くは無いのだが、体力が無いため剣先の動向に振り回された拳句、スピードが出ずにすべてを台無しにしている。

（剣よりも弓の訓練を多く加えたほうがいいかもしれない）

やはり人には向き不向きがある。目の前で必死に剣を振るう少女はどう見積もっても剣技に不向きな部類に入る。幾分かマシにはなっているが、習い始めた当初は剣を持ち続けるのさえ大変な程に武器というものに慣れていなかった。

（ソリユードやグレイは普通に戦いなれしているし、一般の兵士と混じっていても違和感はないけど彼女は……）

仕草や言動から見ても彼女は高貴な姫君だ。兄二人とまとっている空気が違う。

かと言って、彼らが兄妹の振りをしているのかといえばそうでもないようだ。シエリルとすぐ上の兄との顔立ちはどことなく似ているし、髪の毛の色と瞳の色でいけば上の兄と彼女は同一の者を持っている。

（本当に、なんかちぐはぐな兄妹だよな）

スターリングがそんな余所事を考えているのがわかるのか、彼女は大きくほほを膨らませると目暗滅法に剣を振り回してきた。

「そんなに滅茶苦茶に振り回すと、自分に刃が向くことになるからスターリングはそれだけいうと無駄の無い動きで少女の後ろへと回り込み剣を叩き落とした。

「だって…、剣の…：…稽古して…：…に、他…：…事考えてるから彼女は上がる息を抑えながらも必死に文句をつけた。

「どうやら考え事をしていたら彼女の体力が切れるくらいまで剣を揮わせてしまったらしい。

「わかった。でもとりあえず、休憩しようか」

「やっと自分の方へと機を向けてくれた少年に向け、再度、剣を拾い構えようとしているシエリルにスターリングはそう提案したのだ。」

## 第二十七話：主女の憂鬱（後書き）

数ヶ月ぶりの小説更新です。

引越しと、コンピュータの買い替えでしばらく更新できませんでしたがやっとこさ、め目途がつかえました。

話は主人公から離れて妹のシェリルファーナとソルデイスソルデイスの親友・スターリングを中心として暫く続くことになると思います。

## 第二十八話：伝書鳩の知らせ

スターリングの提案にシエリルは素直に頷くと、大きく息を吐いてその場にへたり込んだ。

自分の体力の無さが本当に嘆かわしい。

「私……本と……に、強く……なれる……かな？」

聖長であるルアンリル・フィーナが用意してくれた滋養強壮に効果のあるドリンクを飲みながら、シエリルは自分とさほど年齢の変わらない自分の剣の師匠に問いかける。

スターリングはそんな彼女の表情をちらりと見ると心の中で嘆息をついた。

彼女がこれほどまでに『強くなること』に執着する要因は自分にもある。

スターリングの初めての親友である彼女の兄・ソリユードの旅立ちの際に『守られている状態で口を挟むことなどできない』と詰めた言葉で止めを刺したことが大きく関与しているのだろう。

「とりあえず、始めたときから比べれば雲泥の差だろうね。でも、君の場合は剣よりも弓のほうに向いている」

「でもっ！」

スターリングの言葉に少女はいち早く反応した。これはいつもの言葉を繰り返すんだらうな、とスターリングはげんなりと彼女を見つめた。

「弓じゃあ、前線に出られない。それじゃあ、また守られてるのと一緒にじゃない」

何度そうでないと告げても、彼女はその言葉を繰り返す。なまじっか、弓・槍・剣とすべての武器に通じる兄弟・知人がひしめいている彼女にとっては、『弓でしか戦えない』は『後方で守られるしかできない』となるのだらう。

「それにっ……」

ぴゅいぴゅい！

シエリルがさらに続けようとした瞬間、天空で鳥の鳴き声が響いた。見ると小さな鳩が大きな鳥に襲われそうになっていた。

スターリングは遠めでその鳩の足に何かが括り付けられていることを確認すると今日こそはシエリルに渡そうとして持つてきていた弓を取り、大きな鳥の翼ぎりぎりに矢を放った。

急に飛んできた矢に驚いた鳥は獲物を捕獲せずに、大空へと舞い戻っていく。それとは逆に小さな鳩は揚力を失ったように落下し始めた。

息が整っていたシエリルはその鳩の落下点になりそうな位置まで走ると、空から落ちてくる小さな鳥を白い手のひらで受け止めた。

「ナイスキャッチ！」

スターリングの声に自分が無事に受け止められたことを改めて理解したシエリルは手の中に納まった小さなぬくもりへと視線を移した。彼女の手の中の命は、少々翼に傷を負っているものの、その他の部分には大した傷も無くくりくりと瞳を動かしていた。

ただ足の部分に取り付けられていた手紙が少し解けかけて落ちそうになっている。シエリルがそれを直そうと指を触れると、手紙はポロリと鳩の足から外れた。

(どうしよううう)

慌てた彼女が助けを求めるようにスターリングを見上げると、彼は小さく肩を竦めながら彼女の手に転がっている文を開いた。

「大丈夫？」

驚いたように目を見開き問いかけてくる少女に、彼は小さく笑って見せる。

「誰宛か確認するだけだよ。そうでないと届けることも出来ないからね」

こういう連絡手段をとっているということは急ぎの用件の場合が多い。それに重要なものはやはり人伝の手紙ついでで送られてくるはずだから、手紙を開いたところでそれほどその責めを負う事は無いだろう。

開いた手紙には綺麗に整った文字で小さくつづられていた。

『貴殿よりお預かりしているソリユード・アドラムの推挙にてこちらへ軍師を紹介したい』

詳しい内容は後日、定期便にてお送りする、連絡請う。 K・オ  
ージエニツク』

二人の視線は手紙の内容よりもひとつの名前に集中していた。

『ソリユード・アドラム』、それはシエリルにとっては一番俊の近い兄の偽名で、スターリングにとっては短い間だったがともに旅をした友人の名前だ。

(しまったな……)

安易に行動した自分に彼は心のうちで小さく舌打ちした。

第二十八話：伝書鳩の知らせ（後書き）

ものすごく久しぶりの更新です。

王女と少年の剣術修行。王女の周りは規格外人物ばかりなので並より少し上程度の自分の実力では見劣ってしまうようです。

## 第二十九話：少年少女の葛藤

年の近い兄が旅立ってから、彼女は彼がどうしているのかずっと気に留めていた。

とくに年上の兄・グレイが回復し、グレイの彼女とみなされる聖長・ルアンリルと仲睦まじい姿を見ていると、余計に彼を孤独にしている自分の存在を思い知らされているようだ。

しかしそれでも無理に飛び出し、彼を探しにいかないのは彼女自身にそれをできるだけの技量が無いことを痛切に理解しているからだろう。

守られるだけの立場では文句など言えないと、スターリング自身が彼女に突きつけた言葉が彼女をここに押しとどめているのだ。

「この手紙、至急、大將軍にお届けする」

少女の視界からソリユードの名前を遠ざけるように、スターリングは手紙を元々あったように折り畳んだ。

「あ、はい」

少女は彼の言葉に頷くと鳩を胸に抱えたまま自分の剣を拾い上げる。どうやら報告に行く彼についていく事に疑念も持っていないようだ。スターリングはふうっと小さく息を吐くと頭を振って見せた。

「僕だけで行くから、剣を片付けておいて」

軍属である自分ならまだしも、彼女に將軍の元へ行く資格は無い。たとえどこかの貴族の姫君だろうが、だ。それが彼女には理解できていないようだ。

「でもっ！この鳩を保護したのは私よ、その手紙は私が届ける義務があるの」

少女は声を張り上げると、絶対に渡すものかと手の中の鳩を胸へと抱きこむ。

こうなった彼女を言い含められるのは、今は遠くにいるソリユードだけなのではないだろうか、とスターリングはこの頃、思うように

なつてきていた。だからと言って彼女の言い分を聞いていたら、彼女はいつまで経っても自分の不自然さに気づかないだろう。

彼は気を引き締めて、彼女の申し出に首を振って見せた。

「だから、將軍のところには届けるのに軍属じゃない君が行くのは間違っているでしょ」

「それでも、私が拾ったんだから私が届けるのっ！」

自分の願いを聞いてくれない少年の言葉に、シェリルは目元に大きな涙の粒を浮かべ、「いやいやいやっ」と頭を振る。

(しまったなあ)

改めて、彼女の前で手紙を開いてしまった事をスターリングは悔やんだ。

絶対に譲らない二人の態度はその場の空気を膠着させている。

「二人して、何、楽しんでるんだ？」

「ケイシュンさんっ！」

二人の間に漂っていた緊張をあつさり切ったのは、聖長とともにこの町を守る軍の世話になっている龍族の若き副長ケイシュン・ロンファだった。

軽い口調でにやりと笑う彼に、二人は少し顔を赤らめると自分の手にあるものを差し出して反論する。

「僕はこの手紙を將軍に届けようとしているだけです」

「私は一緒にこの鳥を將軍に渡すからそれについて行こうと思っただけです」

「別に楽しんでるわけじゃないです」

最後は声をそろえて反論した二人に、彼は人の悪そうな笑みを更に深めるとスターリングの手の上にある手紙と、シェリルの手の上で目をくるくるさせている鳩を掻っ攫った。

「それじゃ、両方とも俺が届けてやるよ」

「ああっ！」

あっという間の出来事に二人は目を白黒させながら、声をあげた。

「ずるいですっ！ケイシュンさんっ！その鳥は私が連れてくのっ！」

体いっばいで抗議するシエリルにケイシユンは肩を竦めると、仕方ないとばかりにぼんつと彼女の頭を叩いた。

「はいはい。じゃ、お嬢ちゃんは俺についてくるかい？」

「いいの？」

「ばああああつと明るくなったシエリルの顔とは逆にスターリングは慌てて「ケイシユンさんっ！」と目の前の青年に非難の目を向けた。

「って訳だからお目付け役のスターリング、お前もついて来いよ」しかし龍族の青年はそんな少年の文句など聞き入れるはずもなく、諦めるとばかりに肩を軽くぽんぽんつと叩いてみせた。

（結局こうなるんだ）

そんな青年の態度に、スターリングはがっくり肩を落とす。

ふと視線を感じるとシエリルが大きな目をこちらに向けて、何か謝罪しようとしている。

彼はそんな少女の視線に、小さく笑って見せると、自分を諦めさせるように小さく息を吐いたのだった。

## 第二十九話：少年少女の葛藤（後書き）

サブタイトルが見つかりません。っていうか、今回のサブタイトルほど付けにくいものはありませんでした。

せめて將軍のところまで辿りつけたら『大將軍への報告』とでもつけられたんですけど。

話的にはケイシユンの漁夫の利……これをそのままつたら何の話かわからなくなるので、却下ですよね。

とりあえず、苦勞人スターリングの受難は続きます。

### 第三十話：將軍への報告

大將軍・ガイフィードはいつものように町が見下ろせる要塞にて執務をしていた。

ここ最近、王族を名乗り近隣の村から接待を受ける偽者が出ているという苦情が多数出てきている。特にひどいのはサイラス・ソルデイスの両王子の名を語る場合で、好き勝手に振舞っては村の若い娘を陵辱することまでやるらしい。

そんな被害に対しての対処を一手に引き受けて貰っているのはグレイ・エイシエス。現在身分を隠して部下として働いてくれているクラウス・ガリユーゼ王子である。

影で『王族殺し』などと言う汚名まで受けながらも、その仕事を率先して行う彼の姿は、この都市に彼らが現れたあの日、『弟王子』ソルデイスを護るところか自身が大怪我を負ってしまった、結局、最後まで護られてしまったことを彼は悔いているようだった。

現在も近隣の村から王族を名乗る者が狼藉を働いているとの連絡を受けて、クラウスは数名の部下とともに旅立ってしまった。

「まったくエイシエス隊長は真偽の確認もまだの内に討伐に行くなど……」

ガイフィードの元に書類を持ってきた文官の一人が、クラウスの行動に非難の言葉を発する。

「本物が現れても彼の手により葬られることになりかねません」

「これだから粗野な『王族殺し』殿は困るのです」

それに追隨して発せられた科白を発した文官たちに、ガイフィードは鋭い視線を送ることで黙らせる。

そんな大將軍の行動に、傍で控えていた副官のストラウムは苦笑した。

この町の中で、彼らの、グレイやシェリルの素性を知るものは限られている。

もともと王子付きの世話係りをしていた聖長のルアンリル・フィーナ、龍の副長たるケイシユン・ロンファ、それから將軍と自分の二人、たったそれだけだ。

スターリングはもしかしたら感づいているかも知れないが、明確には知らせていないはずだとクラウドの口から聞いている。

「エイシエス卿は偽者だという確証を得たから、討伐へと赴いている。巷で彼に対する芳しくない噂があるようだが、それをこの執務室まで届けるのは如何かと思うが？」

静かな口調で発せられた言葉に、文官たちは居住まいを正すと礼をし、その場を辞すためにそそくさと扉へと向かった。

「うおっと、これはこれは皆さん、お揃いで」

開いた扉の向こうでは、驚いた様子の若き龍の副長が文官たちに気軽に挨拶をしてきた。

彼の後ろには気まずそうにしている少年と憤慨している様子の少女の姿がある。

先ほど自分達が話していたグレイの部下と妹だということに、彼らは小さく舌打ちし、侮蔑するように睨み付ける後、廊下を去っていた。

「立ち聴きとは趣味が良くないですね、ケイシユン殿」

苦笑しつつ、嗜めるガイフィードに、彼は肩を竦めて見せる。

「さすがにお嬢ちゃんを連れている状態で今の会話の中に入れませんよ」

正確には、話の内容を聞き状況を考えずに乗り込もうとしたシエリルをスターリングと二人で宥めていたのだが、その事は言わなくても判って貰えるようだ。

「それで、どのような用事かな？」

將軍は突っ立ったままの3人を自分の前に手招きしながら、問いかける。

その問いにケイシユンは先ほど二人から取り上げた鳩と手紙をガイフィードの前に差し出した。

「これは？」

差し出された物を見て問い返したのはそばで見ていたストラウムだった。

「ソリユード兄様からの手紙です！」

「違います、南方將軍オージェニツクきょうから閣下にあてた文章です」

勢い込んで答えるシエリルの横からスターリングが訂正を入れた。

本来なら將軍宛ての手紙を読んじまったことは知られてしまいが、真実を違えて報告するよりはましに思えた。

「ほう、それは」

年若き少年少女の言葉を頭の中で継ぎ合わせて理解したガイフィードは、小さく笑いながら小さな手紙を開いた。

### 第三十話：將軍への報告（後書き）

やっと手紙がガイフィードの元へと届きました。

シェリルは身元が知られている人がいるので、少し我侷に振る舞っています。

### 第三十一話：王女の主張

手紙に書かれた短い文章にガイフィードは二人の言葉の意味を改めて理解した。

『貴殿よりお預かりしているソリユード・アドラムの推挙にてこちらへ軍師を紹介したい』

詳しい内容は後日、定期便にてお送りする、連絡請う。 K・オージェニツク』

目の前の王女はこの文章を読んで、末兄王子ソルデイスの今の居場所を知ったのだろう。

王子が一人旅立ちを決めたあの場で彼は『オージェニツク卿に自分の仕官先を紹介して貰う』と言っていた。ゆえに彼女は末兄が南方ではない『何処か』へ仕官しているのだと信じていたのだ。

もちろん、軍に属しているグレイヤルアンリル、目の前のケイシュンもソルデイスの仕官先はすでに知っている。

だが彼らは一様にして彼女へその場所のことを知らせていなかった。つまり、彼女がそれを知り、彼の元へと旅立ってしまう危険性を根源から排除していいのだ。

実際、この執務室の主であるガイフィードも副官・ストラムも同じ考えていた。

（しかし偶然にも伝書鳩の手紙を読み、その仕官先を知ってしまったこれは、偶然としてもできすぎているな）

ケイシュンが軍の施設にシェリルを連れてきたのは、この後をどうするのか大將軍とも呼ばれるガイフィードに判断を仰ぐためだ。そうでなければ、ケイシュンがグレイが外部に出ている時に軍施設へと彼女を連れてくることなどないだろう。

（さて、どうするべきか）

最近の王女は、昔馴染みに囲まれて暮らしている次兄といえるよりも、自分達を護るためにたった一人で旅立ち、暮らしている末兄の元へと行きたいと思っている。

次兄であるグレイ　　クラウス王子からしてみれば『何故、旅立ったのか考える』という所だろうが、王女にはそこまで考えが巡らない。

（それにソルデイス王子が推挙している軍師というのも気になる）あの王子のお眼鏡に適うとはいったいどういう人物なのだろうか。勿論、自軍の軍師として迎え入れることは吝かちかたではない。

（とりあえずは、詳しい内容の書面が来てからこちらに来てもらう旨の手紙を出すか）

その場合にはこちらから迎えの人間をやらねばならないだろう。

（いや、これはいい機会かもしれない）

王女の不満と、何よりもこれからの対処などを含めて、この機会は最良に感じた。

ガイフィードはそこまで考えを巡らせてから、目の前で待っている少年達に視線をやった。

「オージエニツク卿からの連絡、届けてくれて感謝する。キャレット少尉には迎えに行つて貰うかもしれないから、その用意をしておいてくれ」

急な申し出に、スターリングは目を丸くしたが、すぐにそれを理解するとぴつと背筋を伸ばして承諾の敬礼を取った。

「私もっ！」

スターリングが命令を受けたのを見て、シエリルは慌てて自分も随行すると申し出た。あちこちで起きている『偽王子』による事件の解決のため、兄・グレイは暫く帰ってこない。こういう時でないと自分がソルデイスの元に行く機会はなくなってしまう。

「シエリル、これは遊びじゃ……」

「わかつてるっ！わかつてるわっ！だけどっ！……」

嗜めようとする少年に、シエリルは身を震わせながら言い募る。

「私は、ソリユート兄さまの所に行きたいの！会いたいの！どうして駄目なのっ!？」

声を荒げる少女にスターリングは「だからっ!」と言葉を遮ろうとした。だがそんな彼の口を、後ろで見守っていたケイシユンが大きな手で塞いだ。

(なんでっ!?)

自分がそうされるりゆくあ判らず、スターリングはぎっと自分の口を塞いでいる龍の副長を睨みあげる。

しかしケイシユンの視線で諭され、仕方なく「わかりました」とばかりに肩を落とした。

### 第三十一話・主女の主張（後書き）

シエリルファーナ、未だ、別れの際の王妃ははみやの言葉を実践できていません。

この状態だとシエリルはわがままな王女ですが、それでも人一倍、兄弟が大切に、その兄弟が一人でいることは耐え難いこと、というわけです。

### 第三十二話：旅立ちへ条件

「グレイ兄さまにはルアンリルがいる。名を汚してまで挑める仕事もある。私はこの町にいても何にも役に立たない！それなら、ソリユート兄さまの傍にいたいことぐらいしたいのっ！」

シエリルはその瞳いっぱい涙をためながら言い終えると、じつと大將軍を見つめた。

この場には彼女たちの素性を知らないスターリングが居る。ゆえに彼女は細心の注意を払いながら將軍へと訴えた。

少女の訴えにガイフィードは鷹揚に頷くと、静かな声で言葉を発した。

「たしかに、今、君がここにいることは無意味かもしれないね」

彼の返答にストラウムとスターリングは目を丸くした。

シエリルの癩癩みたいな申し出など、將軍がさっさと一蹴してくれるものだと思っていたのだ。

逆にケイシユンは、小さく首をすくめて見せる。

そんな周りの様子を見ながら、老將軍は重々しく言葉を続けた。

「だからと言って、君が彼の所<sup>ソリユート</sup>へ行くことが正しいとは言えない」  
きつぱりと言いつつ、君が彼の所へ行くことが正しいとは言えない

そんな彼女の幼さを小さく笑い飛ばし、將軍は静かな口調で言葉を締めくくる。

「それを正しいと思わせるだけの結果を旅の間に示しなさい」

「結果？」

將軍の言葉が難しすぎるのか、シエリルは首を傾げて聞きなおした。しかし、ガイフィードはそれに答えることなく王女の後ろに控えていたケイシユンへと視線を移動させた。

「ケイシユン殿、この二人についていって、向こうに突くまでに彼女がふさわしく成れたかどうか見極めて頂けませんか」

その申し出もすでに予想していたのか龍の副長は丁寧<sup>丁寧</sup>に將軍へと快

諾のお辞儀をして見せた。

「結果つて、何の結果ですか？」

シエリルは未だ、自分が『何』を試されているのか判らず、將軍を訝しげに見る。本当に彼女には何故、兄王子達クラウスとソルデイスがこの場所へと、兄弟以外に彼女を庇護することのできる人物がいる場所へと彼女を残しているのか理解できないようだ。

「それは自分で考えなさい。ヒントはキャレット君と貴女きみとの違い、だ」

ヒントを与えるなど甘いかもしれないが、これが最大の譲歩だろう。「オージエニツクからの連絡が到着し次第すぐの出立だ、二人とも準備をしてきなさい」

將軍の言葉に二人はすぐに背筋を伸ばし敬礼をすると、挨拶もそこそこに部屋を辞した。

残されたケイシユンは二人を茫洋とした表情で見送ってから、再びガイフィードの前に戻った。

「王子ケイがいない間に決めてしまっても良かったんですか？」

心配そうに問いかけてくるストラウムにガイフィードはふうつと溜息をついた。

「よくは、ないだろうが、仕方ないだろうな」

「最近、あまりよくない輩やからもいるし、仕方ないでしょ」

大將軍の言葉に追隨するようにケイシユンも頷く。

「グレイがあんな異名を受けてしまったために、彼女おつちに対して害を与えようとする下級貴族やからが現れ始めてる。そんなのが彼の留守中に彼女を襲いかねない」

王子クラウス自らが進んで受けた『王族殺し』という異名はすでにいろんな都市に届いている。

そんな地方都市から『今のうちに王族へ恩を売っておこう』という勘違いな連中がここ数ヶ月この町へと入ってきていることはガイフィードの耳にも入っていた。

さらには先ほどの文官たちみたいな連中もいる。

彼らが万が一、王女である彼女に何かすれば、それは遠方で一人が  
んばっているソルデイスを悲しませることになる。

「だからと言って今のままのあの子を後継王子ソルユードの元に連れて行くの  
は、彼自身の正体がばれる一因にもなるだろう」

ケイシユンの言葉に返すようにガイフィードはそう呟くと、もう一  
度大きな溜息をついた。

そんなガイフィードの様子にケイシユンは小さく笑って見せる。

「それでも、きちんと考えさせれば、彼女だって理解できる。なん  
たって優秀な彼らの妹ですからね」

そう締めくくったケイシユンの言葉に、ガイフィードもストラウム  
もゆっくりと頷いた。

### 第三十二話：旅立ちへ条件（後書き）

やっとこさ、更新ができました。

何度も打ち直して、本当にやっとなんて言葉が一番です。シエリル  
ファーナ、本当に動かさにくいです。スターリングは動かさやすい  
んですけどね。

シエリルを退場させたら、あつと言つ間に話が進んでくれました。  
後、1〜2話、シエリルたちの話が終わったら、物語の場所が変わ  
ります。

### 第三十三話：王女の答え

大將軍の執務室を出た少年と王女は足早に自分達の住んでいる宿舎へと向かった。

やっと末兄の元へと行く許可を貰ったことは嬉しいが、將軍の条件の『意味』が判らず、シエリルはその道すがらずっと考え込んでいた。

（スターリングと私との違い……）

そんなもの多すぎてわからない。まず、性別、それから戦闘能力この二つは確かに違うが、そんなことを言っているのではない気がする。

（後は生活力、判断力、それから……末兄様の信頼を得ている、こと）

兄弟の誰をもが欲しがる『信頼』を彼は持っている。それも殆ど出会って間もないといってもいい時期に、それを獲得していた。

もし將軍の言う違いがそこだというのなら、彼女はまだまだ彼の元へと向かう資格などないと言っことだろう。

（もしかして、遠回しに旅立つのを諦めさせようとしているのかな）そうは思いたくないのだが、思考はどんどん後ろ向きになっていく。

「よう、スターリング。今日もお姫様のお守りかい？」

二人が宿舎の入り口を通ったところで、明るい声が不意にかかった。見ると、宿舎の中でも独身寮みたいな施設の賄いをしている中年の女性が明るく手を振っていた。

「お守りって……剣の稽古だよ」

スターリングは苦笑しながら、それに答えている。ごく当たり前の光景だ。

そんな中、シエリルはふと、先ほどかけられた言葉に首をかしげた。「お姫様？」

どうして自分が『姫』であることがばれたのだろうか。彼女はそれ

がどうしてもわからなかった。

不思議そうに問いかけてくるシェリルに、彼女は目を丸くしながら驚きの声を上げた。

「あんたのことさ、わかってなかったのかい？このあたりじゃあ、グレイに匿われている貴族のお姫様だつて有名だよ」

とんでもない誤解と、自分が『貴族』として周りに見られていたということに、シェリルは慌てて言葉を返した。

「グレイ兄さまと私は兄弟です」

そう主張する少女に、女性は頭をぽりぽりと掻きながら、疑わしそうな視線でシェリルの頭からつま先までを一通り見てため息をつく。「つて、言つてもねえ。グレイはあの通り、普通の町の人間だけど、あんたは全つ然、上流の人間つて感じだからねえ」

的確な答えを突きつけられて、シェリルは目を見張った。

そういえば王都陥落の際に逃亡を手助けしてくれた旅の一座でも、<sup>グレイ</sup>次兄は普通に外で村人に接することが許されていた。

<sup>サイラス</sup>長兄が捕縛された時も、自分は踊り子のお姉さんたちの荷物の中に隠されたが、彼は用心棒達の中にも気づかれなかった。

王城にいた時、女官達が彼の事を『粗野』とか『気品が足りない』とか言っていたことも覚えている。自分も末兄<sup>ソルティス</sup>も彼の誇り高い部分を知っていたので、『見る目がないね』と笑っていたのは、遠い記憶に残っていた。

（もしかして、将軍が言おうとしているのつて……私が試されているのつて！）

唐突に判明した『答え』にシェリルはその女性の手を掴んだ。

「それつて、スターリングもですか？」

だが、女性は急に捕まえられたことに及び腰になりながらも、ちらりと少年の方へと視線を投げかけた。

「スターリングも確かに下町つて言うか、普通の田舎の少年つて感じだね」

女性の評にスターリングは小さく肩を竦めて見せた。こういふ宿舎

で下宿のまかないをしているだけある。なかなか見る目がある。

(どうやら、答えが出たようだ)

少女の辿りついた答えに、少年は見られないように小さく笑った。シエリルは女性の出した答えに満面の笑みを浮かべるとその手をぶんぶん振り回した。

「ありがとうございますっ！」

「はあ？」

突拍子もない感謝の言葉に目を白黒させている女性へと、シエリルは最上の敬意を込めてお辞儀をすると、自分のことを待ってくれていたスターリングとともに足早に宿舎の部屋へと帰っていった。

### 第三十三話：王女の答え（後書き）

やっとシエリルにも將軍の言葉の意味が捉えられました。

もともと頭が悪いわけではないはずなのに、周りが一を訊いて十を知る人や、一を聞く前に自分の能力で百を理解してしまうような人間なのが、彼女の凡人ぶりを際立たせています。

次からはまた暫く主人公たちの方へと話が戻ります。

### 第三十四話：落ちてきた子供

はあっ……………

はあっ……………

はあっ……………

息が上がるのを感じつつ、少年は少女の手を引いて走り続けた。背後から聞こえる剣戟は、親とはぐれた自分達に『微力だけど護つてあげるよ』といつてくれた青年が、盗賊を相手に戦っている音。振り返つてはいけない。

振り返れば、それだけ追いつかれる可能性が高くなる。

分達みたいな戦闘能力もない子供はさっさと隠れるか、逃げ切らないと、足手まといになる。

「もうすぐ……………目的の村が見えてくるはずっ……………」  
手を引かれていた少女が上がる息を何とか抑えながら、小声で少年に告げる。

彼女の頭にはこの辺りの地図がしっかりと入っているのだろう。

その村にたどり着けば、同じように自分達を護ってくれていたもう一人の青年に会えるはずなのだ。

「キット！右に降りてっつ！」

少女は前を走る少年に声をかけると同時に、自分もそちら側へと体を移す。

急激に降りる道は足場が悪い。その上、この数日で降った雨のせいで、森の腐葉土はぬかるみ、しっかりと体を支えないと転がり落ちそうになる。

「あっ！うわあっ！」

少年が驚きの声を発すると同時に、彼の体は重力に従い転がる。

「きゃああっ！」

少年に手を捕まれたままだった少女も、それに巻き込まれ、もんど

りうって斜面を転がり落ちた。

時間は少し前に戻る。

ソルデイスはここ数日、降った雨の影響が里山に出ていないか確認する為、自分の補佐役であるマキシムと一時的なお目付け役になってしまっているフレイルを伴い、村の裏側にそびえるタリヴィエント山の麓に来ていた。

この山は裏も表も急な斜面になっている天然の盾のような山で、この村の防御の役割をしている。

「うわあ、ぬかるんだなあ。下手に子供が入ると、転んで大怪我するんじゃないか？」

(いや、あなたも子供ですって)

獣道に近い山へと続く道を確認しながら感想を述べるソルデイスに大人二人は心の中での確な突込みを入れる。

「とりあえず、村長さんに忠告って、そんなこと昔から済んでる彼の方がよくわかってるか」

ソルデイスは落石の危険などないか確認をしてから、斜め後ろにいる副官に振り返った。

「緊急避難用の洞窟のほうは確認しておきますか？」

振り返ってくる大きな瞳にマキシムが問いかけると、「どうしようかな」とソルデイスは逡巡しながら考え込んだ。

(あれ……?)

その音に気づいたのは3人殆ど同時ぐらいだっただろうか。

山の上の方から聞こえるかすかな剣戟、あとは逃げ回る二つの足音。それは的確に争いから逃れながらもこちらへ走ってきているようだった。

耳を澄ましていると、逃げる足音に乱れが出た。そして小さな悲鳴。

「落ちてくるぞっ！」

ソルデイスの叫び声に、大人二人は山の頂の方を見上げた。少し下がっているそこからでは、彼のいうそれがどこから落ちてくるのか見えない。

しかし小さな副隊長は少しだけ山頂側に移動すると、落ちてくる人影を抱きとめる為に体制を整えた。

「うわわわわあっ！！！」

「きゃああああっ！！！」

「！！！！！！！！！！」

すざざざざざざっ！！

大きな衝撃とともに、少年と少女の体は止まった。

「なんて無茶をっ！！」

少女を抱きとめようとしていたソルデイス自身を抱きとめたマキシムが、抱きとめた衝撃で苦しそうにしている自分の副隊長に文句の声をあげた。

「助けられると、思ったんだよ」

落ちてくる人があんなに受け止めにくいなんて思ってなかった、と言いつがましいことを述べるソルデイスにこちらは軽々と少年を抱きとめたフレイルがはああっと大きなため息をついてみせた。

「無理だろ、どう考えても」

フレイルの声に、少し意識を遠のかせかけていた少年と少女は揃って顔をあげた。

### 第三十四話・落ちてきた子供（後書き）

新キャラ登場です。

いまだ名前が出ていないので次の話があがったら人物紹介に名前を挙げるつもりです。

### 第三十五話：山中のウインザ

「フレイル！！」

声を揃えて名前を呼ばれて、フレイルは子供達の顔を確認した。

「キットに、フィンディ？お前ら、ウインザは？」

落ちてきたのは自分と相棒が旅の途中で拾った子供達だった。

彼はこの村に来る直前に、彼らを相棒のウインザに託しておいたはずだ。

「ベネシエンドに向かう途中で、人買いにフィンディが攫われそうになって山に逃げたんだ」

「ウインザっ！今、お山の中で戦ってるっ！」

少女の主張が早いか、すぐさまソルデイスは腕の中の少女を自分を支えている補佐官にあずけて、落ちてきた急斜面を駆け上がる。

「たくっ！無茶ばかりをっ！」

マキシムは託されたフィンディを、キットを抱えたまま呆然としているフレイルに押し付けて自分が護るべき副隊長の後を追った。

山賊と争いながら、覆面の青年は焦っていた。

多勢に無勢、護りながらの戦闘は無理と踏んで、子供達二人を先に逃がした。

彼らの後を追おうとする人買いの手先となっている山賊の行く手を塞ぎ、足場の悪い山の中で何とか凌ぎ続けているのだが、その彼の努力とは正反対に、逃げたはずの子供の悲鳴がさほど遠くないところから聞こえた。

（大丈夫なのか、二人は）

心配にはなるのだが、確かめに行くことはできない。

山賊たちも暫くぶりに獲る所だった高く売れそうな『少女』を逃が

されてその怒りをぶつけるように、彼に切りかかってくる。

覆面の下から洩れる息はとうに上がっていた。

「邪魔してくれた礼に、その覆面の下の醜い顔でも拝んでやるよ」  
もうそろそろ青年が限界に来ていることを見破った山賊の頭領と思しき人物が、嘲笑しながら彼に王手をかけようとしていた。

「右によけてっ！」

森の中をなれた足取りでかけてくる音とともに、少年らしい声が響いた。

全員が驚きとともにそちらに視線をやると同時に、小柄な体軀を翻して黒髪の少年が覆面の青年の左に迫っていた敵を切り捨てた。

「ウインザさんですねっ！崖から滑り落ちた子供達は助けた。俺はランズール卿よりこの辺りの防衛を任されているソリユート・アドラム。加勢します」

周りを山賊に囲まれているというのにやけに冷静に自己紹介をする少年に、山賊は嘲笑を浮かべる。

「あーはっはっはっ！子供が加勢とはなあっ！」

頭領の言葉に他の人間も晒わらう。

容姿だけなら逃げた少女以上だ。もしかしたら、あの子供二人を足したよりもいい値段がつくかもしれない。これは『飛んで火にいる夏の虫』だ。思わぬ上玉な獲物の出現に頭領は嫌らしく唇をなめた。だが、ソルデイスは彼らのその態度に、すうっと目を細め、とりあえず手近な人間の体を薙ぎ払う。切られた男は対抗するまもなく、何が起きたか判らないままの表情で地面に転がり落ちた。

その信じられない場面に、笑っていた男達は表情を凍らせる。

「十分な加勢になるだろ？」

剣身についた血糊をぬぐうこともなく、少年は自分の手近なところにいる敵から順番に刃の餌食にしていく。

この時になって、彼らはこの近辺で噂になっている村のことを思い出した。

その村は貴族の愛妾といってもいいぐらいの容姿を持ち化け物のよ

うな戦闘力を持つ少年によって護られているという。

「お前、まさかっ!」

「思い出すのが遅いつ!」

ソルデイスは言い科にその相手の息の根を止める。その様子を暫し、呆然としながら見ていたウィンザもすぐさま少年とともに攻めへと転じる。

ちいつと大きく舌打ちした山賊の頭領はそれでも自分の勝利を疑わず、自らも剣を構えて総攻撃の指示をだす。この際、勿体無いが目の前の少年に傷をつける、もしくは殺したとしても致し方ないと彼は考えていた。

### 第三十五話：山中のウインザ（後書き）

キット、フィンディに続いてウインザの登場です。

なんか久々に仮タイトルをそのままサブタイトルに使うことができました。

でもソルデイスの自己紹介を無視して、殆ど喋っていない。問題ありの登場の仕方です。（いや、それとも戦闘中に悠々と自己紹介かましているソルデイスがおかしいかも？）

### 第三十六話：覆面の剣士

「副隊長っ！ご無事ですかつ！！」

剣が交わろうとしたその時、大きな声が割って入ってきた。

視線を移すと、明らかに手だれに感じる青年が自らの腰鞘から剣を抜き放ちこちらに駆けてくる姿が映った。

（せっかく、久々の大金が目の前だつてえのに）

自分達と相手との戦力差は確実に負けてしまっている。この現状で攻めて、一味を全滅させるような真似など彼にはする気はなかった。仕方なしに見切りをつけた頭領は、さつさと撤退の指示を出す。それと同時に案外統率の取れた彼らはあるとついでに村から遠ざかっていった。

ソルデイスはその後姿を冷静に見つめてから、剣についていた血をぬぐい、腰の鞘に戻した。

「マキシムが早く追いついてきてくれたおかげで、無駄に殺さなくて済んだよ」

ふうと息を吐きながら応えるソリユードは、大きなため息をついてみせた。

「敵や賊は殺してかまわないですよ、自分の身さえきっちり護ってくだされば」

「マキシムは時々、物騒なこと言うね」

補佐官の物言いに、ソルデイスは少し呆れる。相変わらずこの補佐官の心配事の第一位は副隊長ソルデイスの安否のようだ。

（前はもうちょっと過保護じゃなかった気がするんだけどな）

そう昔を懐かしんでいると、マキシムはふうっと大きくため息を吐いてみせた。

「自分を一番大事に護ってくださいなら、こんなこと言いませんよ」  
彼自身も自分が護るべき副隊長が呆れていることを感じてはいるが、その態度を改めることはしない。心配しすぎるほどぐらいの方がこ

の少年に対しては丁度いいのだ。

そんな二人のやり取りを横目で見つつ、ウインザは剣を鞘に戻して手短な幹へ体を預けた。

長い間、子供を庇いつつ逃げ続けたせいで、息があがっている。覆面の下から洩れる息は、少し熱かった。

「えっと、あなたがウインザさんですか？フレイルの知り合いの…」

息を整えているウインザに、マキシムが探るように訊いてきた。その瞳にいぶかしむ様な光が見える。

（確かにいきなり覆面の男が現れたら怪しい、か）

彼はマキシムの態度に納得すると、すうっと背筋を伸ばして目の前の青年に手を差し出した。

「ウインザ・バーキッドです。連れの子供たちを救ってくれたこと、感謝します」

変わった風貌をしながらもどこか品のある答えをした青年に、マキシムは警戒を強めた。

しかし、ソリユードの気配からは彼への敵意や警戒感が不思議なほどに感じられない。とりあえず彼は態度を改め、差し出されていたウインザの手をとり軽く握手をした。

「マキシム・ビルウォットだ。そして君に加勢をしたのが、うちの副隊長で」

「ソリユート・アドラム、さっき紹介したよね」

マキシムの言葉を切ってソリユードはもう一度名乗ると、軽い感じに手を差し出した。

「この辺りを防衛を任されている方ですね。ランズール隊の副隊長をなされている素晴らし（くおもしろ）い方だとフレイルの手紙に書いてありました」

言外のニュアンスを残しながらも、握手をするウインザにソルディスは小さく嘆息する。

そんな少年の様子に彼は覆面から唯一見ることのできる、綺麗な深

い青の瞳を細く眇めた。

「おい、マキシム、ソリユード、ウインザ、無事かあ？」

そんな三人を呼ぶ間の抜けたフレイルの声が、上の方から響く。彼は先ほど助けた子供を後ろに庇いながらこちらを覗いている。

「もう大丈夫だよ」

ソルデイスが手を振ると、子供達は我先にと駆け下りてきて未だ疲れを隠しきれしていないウインザに抱きついた。

「無事でよかった」わ」

腹部に圧迫を受けたウインザは少し咳き込みながらも、そんな小さな彼らの感謝に優しく目を細めたのだった。

### 第三十六話：覆面の剣士（後書き）

ウィンザは怪しい格好をしていますが、中身は優しいお兄さんです。とりあえず、場面はまたブロージェカへと移動します。いろんな人物が移動を開始します。

### 第三十七話：知らされた旅立ち

偽王子の討伐を終え、クラウスとルアンリルは部下である一個小隊とともにブロージエカに戻った。

偽の王子を糾弾し、出先にあつた騎士団の駐留隊へとその身柄を渡したので、今回はそれほど荷物は少ない。連れてきた偽王子を牢屋に連れて行き、その後の手はずをやらなくて済む。

「とりあえず、報告終わつたら、飲みに行くかあ？」

クラウスが部下達にジェスチャー込みで問いかけると、旅の疲れを見せていた彼らはいっせいに顔を上げた。

「隊長のおごりっすか？」

「ごちになりますっ」

次々に上がる声にクラウスは肩を竦めてみせた。

「おいおい、最初はなっから俺のおごり決定かよ」

文句を言いつつもあまり嫌がっていない様子のクラウスにルアンリルは苦笑した。

もともと昔からこんな風に周りの人に好かれる人物だ。あの頃は王子としての身分を隠しては下町に遊びに行き、いつの間にか少年達のリーダー格に上り詰めていた。

「と、あまり深酒はだめですよ。あなたこの間、べろんべろんによつて周りに迷惑かけましたからね」

世話女房的なルアンリルの物言いに、周りは大笑いする。

「今から尻の下に敷かれてるようじゃあ、うちの隊長もまだまだだねえ」

「うっせえよ、お前ら。飲み代、自分達で出すかあ？」

からかう部下に、クラウスは胡乱な視線で応える。即座にみんな「そんなことないっす」やら「そう思ってるのはこいつだけです」と逃げ腰になっている。

「隊長っ！お戻りになられましたか」

楽しく笑っている一団に、建物の上から声がかかった。見上げると留守居役としてスターリングとともに残っていたケヴィンがこちらに手を振っている。その表情にすこし曇りがあるのを見て、クラウスとルアンリルは互いに顔を見合わせた。

窓から手を振っていたケヴィンはいったん中に引っ込むと、息が上がるほどの速度で彼らの元まで降りてくる。

そういえば、いつも自分達が帰ってくるのを耳聴く聞きつけての一番に駆けつけてくるスターリングの姿がない。

「どうした、何かあったのか？」

クラウスの問いかけにケヴィンは大きく頷いてみせた。

「隊長の妹さんが旅に出ました」

「「はあ？」」

二人は揃って驚きの声を上げたことで、周りの部下たちが「なんだ、なんだ」と集まってくる。

そんな周りのことなど気にせず、ルアンリルはケヴィンに問い返した。

「大將軍の許可は？」

「受けています。スターリングの旅に同行する形で、龍族の方が一緒にいて行きました」

その言葉を聴き、ほっと胸を撫で下ろしたルアンリルとは逆に、クラウスはさらに深く眉をしかめた。

「なんで、俺の留守居を頼んでたスターリングが旅立つんだ？」

「（（え？気になるの、そっち？））」

ぼそりと呟かれたクラウスの言葉に、ルアンリルを含めた全員が心の中で突っ込みを入れる。

「あ、と、何かベネシエンドのオージエニック將軍からこちらへ軍師の紹介があったみたいで、その方を迎えに行くのにスターリングに白羽の矢が立ったみたいですよ」

ケヴィンの返答にクラウスはますます疑問を増やした。

ガイフィード將軍はクラウスの部下を勝手に使ったりする人ではな

い。ましてやクラウドがいない時にシェリルの面倒を見ることになつている彼には絶対に町を出るような命令はしないはずだ。

だとすると、南方將軍と呼ばれるオージエニック卿から軍師が紹介されているのをシェリルが知り、それを迎えに行くのをシェリルが迎えにいくと主張したからスターリングが行く羽目になったと考えるのが正当だ。

(……ソルデイスにつながる情報を、彼女が手にしたのか?)

3年前、別れの時、病室にいた彼はソルデイスが誰のつてを使つてどこに旅立ったのか聞くことができなかった。退院した後も自分が下手に探りを入れてしまわないように、誰にも詳しくは尋ねなかった。

(オージエニック卿宛てに紹介状を書いてもらつて、そこからソルデイスは旅立ったのか)

改めて知る弟の足取りに、クラウドは小さく苦笑した。

### 第三十七話：知らされた旅立ち（後書き）

この章始まってはじめてのクラウドです。この王子が一番動かしやすいので、さくさくと文章が進みます。たぶん、王子らしくないのがその一番の原因だと思われます。

この章はいろんな人の移動の話なので、いろいろと人事異動が開始されます。

### 第三十八話：弟王子の行方

考えてみれば、簡単な結論だった。

次の王たるソルデイスが下手に貴族たちの力を借りることなどできない。そんなことをすれば彼らはすぐにでも王位の奪還をソルデイスに要求するだろうし、更にはまだ年齢的に正式に王位を継げないソルデイスの後見人になろうとするはずだ。

国王補佐は王族しかできないから、そこには父王バルガスが入ることは必至、そして後見人となった貴族と彼の間に関係が起こり、一族もろとも排除されて終わりだ。

頭のいい弟王子ソルデイスが貴族としてのしがらみが少ない軍部を頼るのは明白だろう。

ましてや王都にあまり訪れたことのないオージェニック將軍は、ソルデイスの顔すらまともには知らないはずだ。あのきらきらと目立つ髪さえなければ、簡単に身元がばれることはない。

「とにかく、今回の件の報告がてら、大將軍に事の次第を聞いてくる。ルアンも一緒に行くだろう？」

考える意識をそこで切り、クラウスは目の前にいる幼馴染に問いかけた。

「そうですね、私の方からも閣下に報告もありますし」

「……ええええっ！今日の飲み会はあ？」「……」

一斉にあがった不満の声にクラウスは首をすくめると大きくため息をついてみせる。

「報告は軍人としての義務だろ。さっさと終わらせて帰ってくるから、いつもの店で先にやっててくれ」

「……やったあ！」「……」

口々に軽い感謝の気持ちを書いている部下を残し、クラウスとルアンリルは連れ立って大將軍の元へと向かった。

ガイフィードの執務室では、將軍とその補佐官が複雑な表情で彼らを出迎えた。

「グレイ・エイシエスおよびルアンリル・エディン、先日よりゴードイエル村にて滞在していた偽王子の討伐より戻りました」

軍の決まりに則った挨拶をする第二王子クラウス・ガリユージェに將軍は「うむ」と答えると、ストラウム以外の人間を執務室から追い出した。

更に念を入れてルアンリルが盗み聞き防止の魔法をかけたのを確認すると、ガイフィードはふうと息を吐いた。

「偽王子の討伐の任務、お疲れ様でした。シエリルファーナ姫のことを聞かれましたか？」

「ええ、とうとう旅立ったかと思いました。ソルデイスのところですか？」

苦笑しながら問いかけてきたクラウスに、ガイフィードは首肯する。

「オージエニツク卿からの知らせを運んでいた鳩が鳶に襲われましてね。それを姫が保護してその際にその手紙を見てしまったようです」

妹の所業にクラウスは「あちゃあ」と頭を掻いた。

「躰がなくなってすみません」

他人に届いた手紙を読むなど、王族じゃないとしてもあまり行儀のよくない行為だ。ましてやそれが軍の連絡事項を伝える手紙であれば、下手をしたらスパイ容疑をかけられても仕方ないだろう。

妹の所業に眉をしかめているクラウスに、大將軍は静かに首を振って見せた。

「クラウス王子に謝って頂く事ではありませんよ。キャレットの話では手紙は勝手に取れたらしいですから」

「そう言ってくださいると助かります」

謝礼の意味で頭を下げた王子に年長者二人は暖かい視線で笑みを作

った。

この王子は破天荒だ、無頼者だとあまりいい噂を立てられてはいなかったが、付き合ってみると彼の本当の礼儀正しさや頭のよさはすぐに感じ取れた。

ただ普通の王族のように鷹揚な態度で行動することができず、剣の道を目指すということできらびやかな服を好まなかったことが、王宮にて王を取り巻いていた貴族達に受けなかっただけのようだ。

そんな好ましい視線を向けられながら、クラウスは自分の頭の知識をフル回転した。

「つまりソルデイスはベネシエンドに居るんですか？」

名前の拳がっているオージェニック將軍はこの国の南国境の要である。<sup>リディア</sup>

たしかベネシエンドを守る位置に要塞を築き、周囲の治安を守っていたはずだった。

### 第三十八話：弟王子の行方（後書き）

今回はサブタイトルのネタがなかった。本当は三十七〜三十九話で二つぐらいの話になるのを目指していたのにせいでサブタイトルのストックも二つだけだったんです。

ちなみにグレイとシエリルはこの町では似非兄妹みたくに見られて  
います。

追加後書：どうもベネシエンドとブロージェカが頭の中でごっちゃ  
になります。ガイフィード將軍が逗留していてクラウスがいるのが  
ブロージェカ。オージェニック將軍の庇護下にあるのがベネシエン  
ド。あああ、やっぱりこんがる。

### 第三十九話：次兄へあにの心配へおもい

しかしクラウスの予測にガイフィードは静かに首を横に振った。

「いや、ランクビット村です。ランズール卿に気に入られ、その村の守護および管理を一手に引き受けていると聞き及んでいます」

告げられた田舎の村の名前に、ルアンリルは眉間に深く皺しわを刻んだ。「鉱石と温泉の町でしたね。野盗に狙われたり、近隣に攻め込まれたりと争いさかいの絶えない場所のはずですが、殿下は大丈夫でしょうか」ソルデイスは大事なこの国唯一の王位継承者だ。その彼がそんな危険な場所を任地としてしていると心配は絶えない。

「彼かたの方はそこで優秀な指揮官としての実力を十二分に発揮されているようです」

情報として伝わってくる王位継承者の近況をストラウムは笑顔で報告した。

その言葉にクラウスは内心嘆息した。

確かに、王都を脱出した後見せた弟の才能の片鱗だけで、その兆候は見取れた。あの脱出の際、行く手を定めていたのは常にソルデイスだった。自分と兄・サイラス、それにルアンリルすらその指示に知らず知らずの内に選択させられていたのだ。

その彼が誰も知る人のない、知っている人の目のない所だったら存分にその指揮能力を発揮できるはずだ。もともと彼のカリスマ性は高い。それを態わざとひた隠かくしにしているようだが、少なくとも彼の兄である自分と、恐らく長兄サイラスもそれを判っている。

だからこそ自分の名前を汚していたとしても、彼の名を騙かたる者を冷酷に粛清することもできるのだ。

ソルデイスがその美しい黄金の髪に豪華な王冠を戴くその時まで。

クラウスはそこで一旦思考を切ると、少しだけ心配そうな表情を浮かべた。

「それにしても、あいつの邪魔にならなければいいが」

ソルデイスがどうして一人で旅立ったのか、未妹<sup>シェリル</sup>はいまいち理解出来きっていない。それに兄である自分と一緒にいるせいか、彼女は未だ『町の子供』に<sup>な</sup>為り切れていなかった。

彼らが居を構えているアパートの大家は『グレイ』の事をシェリルという貴族の姫君を預かっている下級騎士だと勘違いしている。最初のうちに兄妹と紹介しているし、髪も瞳もシェリルと彼は同じ色をしているのに、その誤解は全く解ける気配はない。それはクラウスが町人階級の中に紛れこむ術を見につけているが、彼女にはそれができていないことの証明に他ならない。

そんな妹が傍に行くことでソルデイスがソルデイスであることが廻りにばれる事へ彼が懸念している事に、大將軍も思い至ったのか安心させるように「大丈夫です」と声をかけた。

「だからこそ、スターリングを使者に立て、ケイシユン殿を共につけたのです。もしあの方に害が及ぶと判断されたときは、その二人が止めてくれる予定です」

正式にそう依頼したわけではないが、あの二人ならきちんとガイフイードの意思を汲み取れるだろうと、大將軍は考えていた。

「それならば、妹が大ポ力をやらかして戻ってこないように俺は精霊にでも祈っておきます」

クラウスはその言葉で締めくくると、ルアンリルの方へ視線を投げける。聖長はふうと大きく息を吐くと、手を中空に閃かせる仕草で境界を解いた。

ぱあんと空気がはじけるような感覚と共に、廊下外の扉から人の話し声とかが洩れ聞こえてきた。

「それでこの後はどういう予定かな？」

先ほどもでは違う『部下』に対するガイフイードの言葉に、

「一仕事終わりましたので、飲み会ですよ。部下に<sup>たか</sup>集られてきます」と、おどけてみせる。

「私は彼のお目付け役です。未成年ですから深酒させないように」

( 止めるといふ選択肢はないんですか。ルアンリル殿 )  
クラウスの言葉に生真面目に付け加える若き聖長に年長者は苦笑し  
て見せた。

第三十九話：次兄へあにの心配へおもい（後書き）

かなり久々の更新です。クラウドは書き易いのですが、何分にも執筆の時間が……それも仕事というより、プライベートの方でよそ事に気を取られてしまったため遅れてしまいました。

内容的には、兄の心配妹知らずという内容です。クラウドにとって妹の動向は弟の安全を脅かすかも知れない心配事になってます。とって、彼は妹も弟もとても大切に思っているのですけどね。

とにかく、家でも夜遅くまでインターネットができる状態になったのでこれからもっと早めに更新したいので、DQと箱庭の誘惑をなんとか断ち切らないと。

## 第四十話：王女の旅立ち

ブロージエカからベネシエンドへと続く街道を3騎の騎馬が移動していた。

うち二つはようやく青年期へと向かおうとしている少年・スターリングとまだ幼さが顔に残っている王女・シェリル、そして残りはい黒髪を後ろにしばっている青年・ケイシユンである。

「この辺りからさらに南に下ると人買いが出てくる。子供だけで旅をしていると確実に狙われるから、行動には気をつけて」

「わかったわ」

小さい頃から旅慣れているスターリングの言葉に、シェリルは軽く答える。

どこか楽しさを隠しきれてない少女の様子にスターリングとケイシユンは心の中で溜息をついた。

少年はシェリルを彼女の末兄の所に連れていくのを未だに迷っている。彼ら兄弟には何か人に言えない事情があるのは見て取れる。この旅に同伴してくれたケイシユンや彼の一番上の責任者たる将軍はそれらを知っているから、最終的にシェリルを彼のもとに連れていくかの判断を自分に委ねた。

なぜ、彼らがこんな重い決断を自分に託してくれているのかわからないが、任されたからには責任をもって見極めるつもりだ。

「そういえば、名前はシェリルのまんまでいいのか」

唐突なケイシユンからの問いかけに、シェリルは首を傾げた。

しかしスターリングには思い当たる案件があるのか、「そうですね」と思案顔になった。

「シェリル・エイシエスじゃだめなの？」

未だどうしてそんな話題が出るのかわかっていない彼女の科白に、

二人はとりあえず馬をとめて神馬を繰るシェリルの元へと集まった。

「シェリル、君はエイシエス隊長の仕事をわかってる？」

真剣に訊ねてくるスターリングに、彼女は「それぐらいわかってるわ」とばかりに不満そうな顔をした。

「兄さま……じゃなくて、兄さんの仕事は偽物王子を退治することですよ？」

単純に答えを告げる彼女にケイシユンとスターリングは大きく溜息をついてみせる。

「そう、偽物……でも、本当に偽物かどうかをわかるのはグレイという人物を知っているルアンを含む俺たちのような人間や大將軍、それにグレイの部下たちだけだ」

クラウスの正体を公表できない以上、彼がやっていることは貴族達にとり『下賤なる者が利己的に王族を狩っている』ようにも映るはずだ。すでにブロージェカに逃げ込んでいた下級貴族たちは、そう裏口を叩いていた。

「貴族の中にはグレイは本当は本物の皇族を狩っているのではと、目の敵にしている者も多い」

その妹が兄や大將軍の庇護から抜けて旅に出たなどと知れば、『グレイ・エイシエス』を苦しめるための絶好のチャンスとなる。

実際、どこからか出立を聞きつけた貴族が流れの傭兵を雇い、彼女を捕獲しようと画策していた。町を出たところからつけてきたその人物を、彼女の気の付かないところで金を攫ませて追い払ったのはスターリングだ。元々、貴族からの仕事に乗り気ではなかった傭兵は、貴族の報酬よりも少なかったが、少年の申し出を快く引き受け、適当に処理をしてやると確約してくれた。

今回の件は『運よく』そう進んだが、次がそうなるとは判らないのだ。

未だそれらの事を理解できていない彼女の態度に、今度はスターリングが言葉が続ける。

「隊長が排除した『王子』たちを使って態わざと資金を集めようとしていた貴族やにとり、隊長の存在は目の上のタンコブに他ならない。それは判る、よね？」

スターリングの言葉に彼女はようやく事の重さを理解し、小さく頷いた。兄が任務として引き受けていることが、どれほどの危険を伴うことが改めて見せ付けられる。

「そういえばソリユードは、今現在、『ソリユード・アドラム』だったよな」

ふと思い出したようにケイシユンが言うと、スターリングはそういえばと手を叩いた。

#### 第四十話：王女の旅立ち（後書き）

クラウスの次はシェリルに Spanien です。

第三十三話の『王女の答え』からすぐに書き始めていた部分だったのですが、時系列を考えて2つ程、別のエピソードを挟んでから再度書き直しました。

少年・少女と人間と関わりを持たない龍族の一行……目立つことこの上ないメンバーです。

## 第四十一話：王女の新しい名前

シエリルも「あっ」と小さな声をあげて、その事実を思い出す。

末兄は自らの素性を隠すために、自分たちとは違う苗字を使っているはずだ。それなのに、妹である自分が『エイシエス』姓を使っていたら、迷惑この上ないだろう。

「シエリル・アドラムで誤魔化せれますかね」

スターリングがシエリルの名前とソルデイスの偽名の姓をつなげて名前を作っている。

「まあ、一般的な名前ではあるな」

アドラムは珍しい姓だが、シエリルという名前は一般階級でもよく使われている名前だ。だが、どこでどうつながるかわからない状況で王族殺しとしての悪名高い『グレイ・エイシエス』の妹のシエリルと南方將軍の副官・オージェニック卿の珠玉の部下になる『ソリユード・アドラム』の妹となるシエリルが同一人物だという痕跡はできる限り消しておきたい。

スターリングとエイシユンが顔を突き合わせてうんうん唸っている横で、シエリルは「そうだわっ！」と楽しげに声をあげた。

「マージ……マージがいいわ。昔、そう呼んでくれる人がいたの」  
自分をそう呼んでいたのは母である国王妃が母国・ロシキスから連れてきた侍女だった。その夫人はシエリルにとり、乳母の様なものであった。

彼女は母やシエリルしかない場所で彼女の第二名である『マジエスト』を縮めて親しげに『マージ様』と呼んでくれた。懐かしい呼び声を聞けなくなって久しいが、自分にはまだ馴染んでいる名前だ。他に新しく名前をつけるより、きちんと反応できるだろう。

「マージ・アドラムねえ」

「確かに、『シエリル・エイシエス』を知っている人が聞いても、他人の空似と通せるかもしれないですね」

北方にあるブロージエカから南方にあるレナルドバードまで距離があるとはいえ、その二つの都市を行き来する者はいる。

この少女が『他人の空似です』としらばっくれるのは無理だとしても、彼女が一番頼りになる末兄がどうにか立ち回ってくれるはずだ。そのためにも彼女の名前は『シエリル・エイシエス』から一番遠いほうがいい。

「それじゃ、今からその名前に慣れてもらおうから。僕達は今後一切君の事を『マージ』と呼ぶよ」

ケイシユンの持っている通行書は、彼の名前とスターリングの名前から『同行・少女一名』としか書かれていない。大將軍がこうなることを見越して書類を作ってくれたのだろう。

「それじゃ、マージ。やっと半分だけど、頑張って走ってくれよ」「わかったわ」

シエリルは軽やかな笑顔で答えると、自分が繰る神馬・ルシエラーへと跨ったのだった。

一人、与えられた部屋にて報告用の書類を書いていたソルデイスは、おもむろに立ち上がると窓から空を見上げた。

遠方の空に白い鳥の影が見える。あれは彼が待っていた答えを持つ鳩だろう。

到着にあわせてソルデイスが手を出すと、鳩はすんなりと彼の指先へと止まった。

彼は鳩の足に括られていた手紙を片手だけで器用にはずすと鳥かごの中に鳩を入れる。鳩は抵抗することもなく入った。余程お腹が空いていたのか、用意してあった餌をすぐに啄ばみはじめていた。

それを目元だけで優しく見守り、やおらに机の上にあった手紙を開いた。

書いてある言葉は予想通りのないようだった。彼は部屋に備え付け

られている階下の部下を呼ぶための紐を引っ張った。  
暫くすると、静かなノックと共にドアが開けられる。

顔を出したのは自分が呼びつけた補佐官・マキシムとこの間から村で居候しているフレイルとウィンザだった。

「お呼びですか、副隊長」

「ついでに付いて来たよん」

「フレイル、お前は呼ばれてないだろ」

丁寧なマキシムの挨拶に重なったフレイルの明るい声をウィンザが嗜める。この光景はここ数日でよく目にするようになった。存外、この三人は息が合っているようだ。

#### 第四十一話：王女の新しい名前（後書き）

ものごつつつ久々の更新です。相変わらず、この天然役立たず王女さまは書きにくい。

更に言えば、スターリングも書きにくい。おかげで王女の部分だけで書きかけ放置をしてみました。

ソルデイスの方へシーンが移ったら、すぐに話が進んだんですけどね。

とにかく、シエリルファーナの偽名はシエリル マージへと変更です。

## 第四十二話：穏やかなお茶会

「いいよ、用事があるのは3人ともだから」

ソルデイスはそういうと部屋の中に備え付けられている簡素な応接セツトの方へと移動する。

3人は顔を不思議そうに顔を見合わせると、彼に倣いそれぞれ気ままにソファに腰掛けた。

「お茶でも入れましょうか？」

一番、流しに近いところにいたマキシムが訊ねると、副隊長の少年は小さく頷いて見せた。ここ最近になって彼が見せるようになった仕草に、彼は少し目を細めてから鳴れた手つきでお茶の準備をする。「マキシムはお茶をいれながら聞いていて」

ソルデイスはそういうと先ほど鳩が運んできた知らせを、広げた形でテーブルの上に置いた。

「オージェニツク將軍からの伝言。ガイフィード大將軍はフレイルのことを軍師として迎え入れてもいいと返事をくれたそうだよ」

その言葉にフレイルは残念そうに溜息をついてみせた。

平民からリディア国において最高位の將軍の作戦参謀の一員として迎えられることを考えれば、異例の大出世ではある。ただこの村に来てからの楽しい時間を考えると、ここを離れることが勿体無い気がしてくる。

だが折角、ソルデイスがオージェニツク卿を経て推薦してくれたのだ。無下にすることなどできない。

「つてえ、ことは俺は紹介状を持って北に向かえばいいのか？」

鳩が運んできた小さな紙片をちらりと見ながら、フレイルはぎこちない苦笑を浮かべている少年に問いかけた。

「いや、とりあえず迎えが来てくれるらしい」

ここに書いてある、とばかりに示された場所には迎えとして3人ほど旅立ったと記されていた。

「ウインザはどうする？」

フレイルは横に座っているウインザにも確認する。

彼は目の前のソルデイスと横に座るフレイルの顔を順に見てから、

「うーん」と考え込む仕草をした。

「私はフレイルの相棒だから、君についていくよ」

「なんで、その答えを少し考え込むかな、お前は」

にっこりと笑って答えた。だるう覆面のウインザに、彼は辟易とした表情で悪づいてみせる。

そんな二人の気の置けないやりとりを暖かい目で見ているソルデイスの姿に、マキシムは少しだけ嬉しさを覚えた。

ここ数年で感情を徐々に表してくれるようになった少年は、彼らが来てから更に表情にバリエーションを持つようになった。それは彼を慕う村のすべての人間にとり、僥倖ともいえる状態でもある。

「お茶、どうぞ」

マキシムはお茶をソルデイスたちの前に置くと、自らも副隊長である少年の隣に座り彼らの前に置かれている紙片を見た。

「ガイフィード將軍の部下の少年と食客である龍族の副長、それから少女。またちぐはぐですね」

読み上げられた言葉に、少しだけウインザが反応する。

他の3人がそれに気づくと、彼露わになっている目元をすがめてみせた。

「龍族の副長というとケイシユン・ロンファ殿かな。少しだけ面識がある」

その言葉にフレイルは目をぱちくりと瞬いた。どうやら彼すらも知らない知人らしい。

「珍しい処に知り合いがいるな」

「面識があるといつても顔を知ってる程度だよ。知り合いの知り合いぐらいで、正式に言葉を交わしたかどうかすら記憶にない」

おどける様に肩を軽く上げる仕草をしてから、彼は入れて貰ったお茶に口をつけた。

「少年、少女つてあるがこの辺りの治安を考えると、心配ではあるな」

つい先日、ウインザの連れていた子供たちに目をつけて人買を生業にしている山賊たちと一戦交えたばかりだ。よほど顔が悪くなければ、今度はその使者達が狙われる可能性もある。

「少年のほうは大將軍の信を受けるぐらいだから腕がたつ人間だろうね。問題は少女の方が」

そう呟きながらティーカップを机に戻したフレイルは、マキシムから紙片を受け取るとその隅々までチェックした。

## 第四十二話：穏やかなお茶会（後書き）

主人公と過保護な3人の青年の奇妙なお茶会風景になってしまいました。その上、ソルデイス、後半、しゃべっていません。おかしい、主人公の存在強化を推し進めていたはずなのに。

## 第四十三話：小さな初恋

「あ、少年兵の名前は書いてある」

フレイルは紙の後ろに書かれた小さな文字に目を凝らした。他の三人もそれに興味津々と耳を傾けた。

「スターリング・キャレット……かな？珍しい名前だな」

「スターリング？」

聞き覚えのある懐かしい名前にソルデイスは目を見開いた。その顔にほんの少しだが笑みが宿っているようにも見える。

そんな彼の様子に今度は大人3人が驚いた。

「お知り合いですか？」

隣から聞いてくるマキシムにソルデイスは「ああ」と明るく肯定する。

「初めてブロージェカに行った時、一緒に旅した仲間だよ。年齢は俺と一緒に。確か西方の小さな村の出身だと聞いている」

ほんの僅かの間ではあったが信頼に値する人間だったように思う。

何よりもまだしっかりと隠していた頃の自分の感情を読める貴重な人間だった。懐かしい名前に自然と少年の眼差しが優しく緩んだ。

「頼れる人物ってことは確かかな」

彼の口から続いた言葉に彼らはぴたりとその動きを止めた。

（（（珍しい、この人が『頼れる』なんて言葉を口にするなんて）））

全く同音に重なった思考と、それが顕著に現れた彼らの表情に、少年は苦笑してみせる。

「俺だって、頼ったりすることもあるよ」

微妙に肩を上げながらおどけて見せるソルデイスに未だ確りと『頼られた』ことのない彼らは少しだけ気落ちして見せた。

襲撃のない時の村は悠久の時間が流れている。子供達は楽しそうに声を上げ、追いかけてっこをしているようだ。

ソルデイスが3人を連れて建物の外に出ると、その中でも年長と思しき二人が目敏く彼らを見つけ笑顔で駆け寄ってきた。

「4人とも、お話、終わった？」

先に声をかけてきたのは長い黒髪を一つにまとめた少女・フィンディだった。彼女は笑顔のままソルデイスの右腕に抱きつき、ソルデイスと同じ水色の大きな眼で見上げてくる。

「さつき鳩が飛んできたでしょ。フレイル達の仕官先が決まったの？」

キットは子供だけでふらふらしていた自分たちを助け、一緒に旅をしてくれた彼らの行く先を心配しているようだ。

「とりあえず、ブロージエカ行きに決定」

「私も、ね」

そう応える二人に少女達はそれぞれの理由で少しだけ口を尖らせた。キットはやっと親しくなった村の人たちと別れるのを惜しんで。

しかしフィンディは寂しそうに居間までの旅の同行者二人を見上げた。

「じゃあ、ここでお別れね」

この科白に一番目を丸くしたのはキットであった。今まで助けられた経緯もあるから、この先も彼ら二人に付いて行くと思っていたのだ。

しかし少女はソルデイスの腕を抱きしめたまま、彼らとの別れを惜しんでいた。

「え？フィンディ……残るの？」

呆然と呟いたキットに彼女は大きく胸を張って見せた。

「そうよ、私、女の子だもの。恋に生きるのっ！」

「……はい？」

少女の言い分に大人3人は思わず声を揃えて聞き返してしまった。キットは思わず自分の姉と彼女に腕を抱えられている造作の整った

少年副隊長の顔を見比べた。

「もしかしてソリユートに恋してるの？」

彼女が非常に面食いなのは知っている。フレイルのことも、ちょっと垣間見たウインザの素顔も「綺麗、素敵」とはしゃいでいた。目の前にいる少年副隊長も綺麗な顔立ちをしている。彼女がほれる条件に当て嵌まっている。

しかし弟の質問に彼女は眉を少し上げてみせる。

「違うわよ。私の恋の相手はマキシム、あなたよ？」

「……はいいいい？」

今度は4人の声が揃ったなあと、観察しているソリユートの腕を抱きしめながらフィンディは楽しそうに爆弾発言を投下し続ける。

「ソリユートは知ってるもん。私の味方をしてくれるって言ってくれたの」

ねえ？と視線を合わせる二人は、キットよりもずっと兄妹のようだし、しかし、そんな和やかな様子をも打ち破るようにマキシムが二人へと厳しい視線を向けた。

#### 第四十三話：小さな初恋（後書き）

フィンディ、問題発言投下です。マキシムは22歳ぐらいを想定している。年差は十というところでしょうか。かなり渋めの好みです。

今回のタイトルは前回からの続きのスターリングについての会話の部分でつけるか、その後の部分でつけるか書く前は迷っていましたが、書いてみたらやっぱり爆弾発言のほう印象が強かったのでそちらを選択しました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9660c/>

---

リディア王国物語 国土鳴動編

2010年10月9日00時37分発行